

資 料

昭和戦前期ダンス・音楽関係雑誌目次総覧 (5)

永 井 良 和

Cumulative Contents of Japanese Music and Dance Magazines in 1920s-1930s (5) The Dancer

Yoshikazu NAGAI

Abstract

In the 1920s and 30s, Modernism was the distinctive feature of Japanese urban culture. To understand that period, an appreciation of jazz music and ballroom dancing are particularly important. Relevant information for reconstructing these phenomena is, however, lacking. This time, three magazines from this period published in Osaka and Amagasaki, *Dansâ* (The Dancer), *Dansu-Fan* (The Dance Fan), and *Dansu-Jidai* (The Dance Time) have been studied with the help of several informants and public libraries. Although there may be many missing numbers, the found issues contain a lot of valuable information that detail the taxi-dance halls that existed in Osaka, Amagasaki, and the Kansai area. Therefore, As a result of this study, I created a log of all the issues that I could find, and reprinted several important articles.

Keywords: Modernism, Japanese taxi-dance halls, Jazz, Ballroom dancing, Music magazines, *Dansâ*, *Dansu-Fan*, *Dansu-Jidai*

抄 録

1920年代から1930年代にかけて、わが国の都市ではモダン文化が開花した。なかでも、ジャズ音楽と社交ダンスの大衆化は、その象徴的現象である。しかしながら、当時の史実を再構成するために必要な基礎資料の整備は、いまだじゅうぶんとはいえない状況にある。この資料では、昭和戦前期に大阪・尼崎で刊行されていた雑誌のうち、『ダンサー』・『ダンスファン』・『ダンス時代』の3誌について、未発見の号や欠号などがあるものの、関西に存在したタクシーダンス・ホールの詳細を知る手がかりとして、目次を復刻し、重要な記事の一部を翻刻する。なお、この作業は、1995年から1996年にかけて連載した、東京で発行されていた雑誌の目次総覧についての資料の続編にあたるものである。

キーワード：モダニズム、都市文化、タクシーダンス・ホール、ジャズ、社交ダンス、音楽雑誌、
『ダンサー』、『ダンスファン』、『ダンス時代』

はじめに 「昭和戦前期ダンス・音楽関係雑誌目次総覧」について

明治時代の洋楽・洋舞の導入の経緯や、それらが正統から昭和にかけてどのように普及をとげたのかについては、多くの研究が蓄積されてきた。筆者も、大学院生時代から35年

ほど、この分野での調査を継続してきたひとりである。研究の成果は、つたない内容ながらも何冊かの書籍として刊行し、あるいは雑誌に論考として発表してきた。また、その調査のなかで確認できた資料群についても、情報の整理と公開をなんとかこころみた。とくに、この時期の社交ダンスの専門雑誌については国立国会図書館に所蔵がなく、内務省の検閲の結果、発売禁止などの処分になったもの、いわゆる「特殊コレクション」と呼ばれた単行本などのなかに往時の状況を読みとることができるにすぎなかった。各大学の図書館についても事情は同じだった。社交ダンスの教師らがつくる法人や団体にも雑誌資料はほとんど保管されていなかった。

けっきょく、瀬川昌久さんや川北長利さん、小山賢之助さんはじめ、音楽・ダンス関係者が個人で保存していたもの、亡くなった関係者から受け継いだ方が手もとに残っていたもの、さらに各地の公立図書館に寄贈されたものなどを探し、また、細川周平さんや和田博文さん、西村貴久男さんら音楽や文学、歴史の領域で同時期の資料を収集していた方がたや、古書店主のご協力やご厚意に助けられながら、ようやく3種の雑誌について目次総覧を作成することができた。

目次総覧を作成できた雑誌は、創刊の順に、『ザ・ダンス』（1932年～1934年）、『ザ・モダン・ダンス』（1933年～1940年）、そして『ダンスと音楽』（1935年～1938年）である。これらは、この『関西大学社会学部紀要』の第26巻第3号から第27巻第3号まで4回に分けて掲載した（1995年～1996年）。また、データの一部はウェブでも公開した。その後20年以上が経過したが、この間、内外の研究者から雑誌や記事に関する問い合わせや取材を受けることもあり、また、インターネットの検索で自分の親族の名前を見出した方がたから記事を読ませてほしいと求められることもあった。未発見の号や、おそらくは未発行の号などもあって、完全な総目次をつくることはできないままだが、それでも作業の意義はあったと考えている。整理の済んだ雑誌については、ご家族から関係する公立図書館への寄贈や寄託のお手伝いをし、また2005年には公益財団法人日本ボールルームダンス連盟に資料室を設置していただき、ダンス関係の図書資料を保管・閲覧する拠点をつくることもできた。

この作業の過程で収集した資料のなかでも、とりわけ重要な書籍は、ゆまに書房から出版された『コレクション [モダン都市文化] 第4巻 ダンスホール』（和田博文監修）で復刻することができた。小野薫の『ダンスホール』（1934年）や伊藤正文『ダンスホール建築』（1935年）など建築関係者の著作には、当時のホールの写真や図面が収録されている。いっぽう森蒼太郎『ダンスホール エロ享楽時代』（1931年）、多田道夫『ダンサーとプロ

ース』(1931年)などの小説、虚実あいなかばするような作品は、デジタル化されるまでは東京の国会図書館本館まで出向いて閲覧室で筆写するしかない資料だった。

だが、この復刻作業でも、雑誌記事については多くを収録することができなかった。玉置眞吉が『ザ・モダンダンス』に1936年から翌年にかけて連載した「社交ダンス十年の想ひで」(号によってタイトル表記がまちまちだが、初回の「想ひで」に統一)と、1930年に『ダンスと音楽』誌からの依頼に応じて、関係諸氏が社交ダンスとの出会いについての回顧を寄稿した「始〔ママ〕めてダンスを習った時」などを収めるのが、かぎられた紙幅のなかではせいっぱいだった。

この時期の社交ダンスやダンスホールには少なからぬ文学者がかかわりをもち、創作の題材を得、その舞台にした。永井荷風、谷崎潤一郎、菊池寛、久米正雄、国枝史郎ら、顔ぶれも多彩だ。ダンスに深くかかわった国枝史郎については、山蔦恒による解説を付した『国枝史郎伝奇全集 補巻』(1995年 未知谷)で小説「ダンサー」(1933年)が復刻され、また末國善己の編集・解説による『国枝史郎伝奇風俗／怪奇小説集成』(2013年 作品社)には長編の「生(いのち)のタンゴ」(1932～1933年)やダンス関連のエッセイが復刻収録された。久米正雄についても小谷野敦による評伝『久米正雄伝 微苦笑の人』(2011年 中央公論新社)が出版され、文庫でも小説やエッセイを集めたものが出版された(石割透編『久米正雄作品集』岩波書店 2019年)。

とはいうものの、この時代のことがらに関心をいだき研究しようとする人は、じょじょに少なくなるだろう。しかし、情報がどこにどのようなかたちで残されているのかを記録して公開することには意味があるはずだ。そのように考えて、関連資料の探索や収集をすすめてきた。

けれども、以前の作業には大きな欠陥があった。それは、収集できた情報が東京で刊行された雑誌にかぎられていたからである。京阪神には数多くの社交ダンス愛好者が暮らしていて、たくさんのダンスホールが存在した。都心に立地しただけでなく、阪神国道沿いの尼崎、西宮、郊外に位置する宝塚や桂、淀、さらには琵琶湖畔や生駒山上などにもダンスホールがあった。そのうちのいくつかは施設の規模も大きく、また演奏される音楽のレベルも高かったといわれている。

こういった話は、東京のダンスホールで勤務していたダンサーやマネージャーだった方がたからもよくうかがったし、東京で出されていた雑誌にも京阪神のダンスホールに関する情報は書かれている。大阪でダンスの専門雑誌が刊行されていたこともわかっていたし、

その一部を複写の複写というかたちではあったが見せていただいたこともあった。ダンスホールごとにニューズレターを刊行していたらしいことも耳にした。だが、まとまった量の現物を手にするまでには、ほぼ30年の歳月が必要だった。

今回は、大阪、それに尼崎で刊行されていたダンス専門雑誌について紹介する予定であるが、創刊号から終刊まで漏れなく収集するにはいたっていない。欠号が多い雑誌については、この紀要で次々と紹介するかたちにはならないかもしれない。その点、あらかじめおわびする。しかしながら、東京で刊行された雑誌記事から知る内容よりは、はるかにくわしい情報が、そこには残されている。それらの一端を整理して公開することで、今後、領域をこえた研究の一助になることを期待したい。

また、さらに残された作業として、日本が領有あるいは支配した地域・都市で営業していたダンスホールの実態の解明がある。これについては、1999年に関西大学経済・政治研究所「調査と資料」第92号として刊行した『植民地都市の社交ダンス（資料集）——大連での勃興期を中心に——』において、収集した資料の一部を紹介し、翻刻や解説をおこなった。その後も作業は継続しており、その成果については、国際日本文化研究センターの共同研究「近代東アジアの風俗史」において報告や公表の機会をつくる予定である。

（５）『ダンサー』1927年

【凡例】

1. 復刻にあたっては掲載当時の目次の体裁を生かした。目次と本文で情報がくいちがうばあいは、その旨を記載した。
2. 本文の組版は基本的に縦組であるため、原文ページのノンブルは漢数字で記載されている。ここでは算用数字にあらためた。
3. 一部の記事を翻刻したが、翻刻にあたってはなるべく掲載時の表記にしたがい、かなづかいや、促音や拗音の文字の大きさもそのままとした。変体がなや異体字などは、可能なものは原文のままとし（「ゐ」「ゑ」）、「え〔江〕」「ネ〔子〕」など元の漢字を補足したものもある。踊り字など横組で表記するのがむずかしいもの、たとえばくりかえしを示す「くの字点」は〔くの字点〕というように補った。漢字については旧字体を新字体に置き換えたが、人名や固有名詞などの一部は旧字体のままとした。
4. 記事の翻刻においては、明らかな誤植や脱落、また誤りの可能性が高いとみられる文字であっても原文のままとし、疑問点については〔カ〕などと補うなどして説明した。ただし、読みやすさを考慮して、改行箇所を1字アケに置き換える、行頭行末の禁則処理について必要に応じて変更するなどしている。原文のルビは適宜省略し、原文にないルビを補ったときは〔 〕を付した。
5. 現代にあっては不適切とされる表現に関しても、原資料の時代背景や当時の価値観をしめすものとして、そのままにしてある。

【時代背景】

雑誌『ダンサー』は、1927（昭和2年）春に大阪で創刊された社交ダンスの専門誌である。

音楽雑誌は明治時代から刊行されているし、また一般の紙誌で西洋音楽や欧州のダンスに言及した記事や寄稿もあった。当時の世界観・文明観に照らして「未開」とされた社会の舞踊が、ものめずらしい風習として紹介されるようなケースもある。もちろん、この社会にも、奉納の「舞」、豊作や大漁を願い祝うもの、あるいは無病息災を祈るためのもの、「能」や「歌舞伎」のように古くからあるものにかぎらず、現在は「日本舞踊」と呼ばれる芸能や「民謡」にあわせて踊られるものなど、人がからだを動かすことによる表現は数多く根づいていた。だが、これら日本列島に暮らす人びとがなじんできた身体芸術・身体技法と大きく異なる西洋風の「ダンス」の到来は、この社会の人びとが、世界の文化の多様性を知るきっかけでもありえた。

社交のため、とくに男女が組んで踊るかたちのダンスは、明治期には舶来の新風俗として関心を惹き、また西洋人との交際において必要な教養だともみなされた。ところが、それを一般の人びとが男女交際の手段としたり、飲食店でのサービスとして利用したりする局面を迎えると、社交ダンスにはきびしい批判がくわえらえる。公衆の面前で男女が抱きあうことは日本の「伝統的」なつつましきとは相容れないものだという批判もあったし、酔客が飲食店の女性従業員と抱擁することを警察が放置してよいのかという見かたもあった。

明治期に日本社会に紹介されたダンスは、西欧の宮廷で踊られたダンスや、あるいは欧米の庶民が楽しんだダンスをもとにつくられ、やがて英国を中心として標準化されていくカップル・ダンスの、その前段階の素朴なかたちのものだった。日本で社交ダンスの愛好者がひろがったのは、この時代ではない。明治中期の鹿鳴館時代や、明治末期から大正期にかけて学校教育に洋楽やダンスがとりいれられた時代でもない。

社交ダンスの一般社会へのひろがりにはもうすこしあとのことで、ジャズという音楽、フォックストロットという踊りが世界的に流行した時代に相当する。ジャズに合わせて男女が社交ダンスを楽しむというかたちは米国から起こった流行であり、たちまち世界にひろがっていった。当時の音楽やダンスの普及の速度は、もちろん、インターネット時代の現在、リアルタイムで音声つき動画として拡散される事態にくらべれば遅かったと認めざるをえない。けれども、米国東海岸での流行は、その月のうちに大陸の西海岸に到達し、そこから航路でつながったホノルルやマニラ、香港、上海、横浜、神戸にも、数か月を経ず

して届いた。もちろん、ヨーロッパにも中南米にも流行は拡大したし、その逆の流れ、たとえば中南米の音楽が新たなダンスの楽しみかたをつくりだし、それが世界に伝えられたこともある。

そのような世界的な文化の伝播において、発信元の情報を、到達点である特定の個人につなぐ役目になったのが新聞や雑誌などのメディアであった。1920年代には、ニューヨークでこんな曲が流行っている、こんなダンスに人気があるという情報は、数週間、数か月のうちに日本のメディアが報じた。ただ、活字やイラストで情報を伝えることは可能でも、また、その楽曲が楽譜のかたちで届いても、それを演奏できるバンドマンがいなければ曲として聴くことはできない。音楽が奏でられなければ、それに合わせて踊ることもできないし、そもそも、ダンスを楽しもうという人もあらわれず、ダンスを楽しませるための施設をつくろうということにもつながらない。演奏者が少ないあいだは、西洋人が利用するホテルなどでのパーティにかざられていたし、蓄音機とレコードが輸入されてはじめて、小さなダンス・パーティが開催できるていどだった。

事態を大きく変えたのは、ジャズ音楽とフォックストロットなど新しいカップル・ダンスの流行だった。洋行した人びとがジャズを知り、旅先のホールや、客船でも踊った。そういうサービスが日本の客船やホテルにもとりいれられていく。

ある趣味や嗜好が理解され、愛好する者が増えるにしたがって、その趣味や嗜好の情報源となり議論の場となるメディアが必要となる。一般の人びとが手にする新聞や雑誌の記事でも、西洋人たちが社交ダンスで交際を深めることは書かれてはいるが、それを自分たちもしてみよう、してみたいという人の数が増えなければ、専門メディアは成立しない。社交ダンスがどんなに物珍しい話題だったとしても、それだけでは月刊誌を出したところでどれほどの人が購入するのか。出版社は、新奇な企画でヒット作を世に送りたいとの野望をいだきつつも、採算を考慮して出すものを決めていた。

社交ダンスという新しい趣味を愛好する人びとについても、それが一定数以上存在するという認識に立ち、ダンスホールの情報やダンサーの評価やゴシップ、社交ダンスの技術解説などの内容だけで誌面を構成しても、じゅうぶんに採算がとれる、あるいは新雑誌によって愛好者を発掘し流行を生み出す可能性が高い。そのような判断があつてはじめて、専門誌が創刊される。そして、社交ダンスに興味をもつ人たちを読者層と想定して編集され、刊行された雑誌は、おそらくこの『ダンサー』誌が最初のものだと考えられる。

商業的なダンスホールの黎明期に相当する時期だったこともあり、記事のなかには、国際交流の手段としての意義を強調したり、風俗営業としてあるていど容認すべきだと論じ

たりするものもふくまれる。

読者として想定できる人の数について、まだけっして多くはないと想像されたはずの社交ダンス専門雑誌が、この時期の大阪で出版された背景を、ふたつあげることができる。

関東大震災によって東京や横浜は大きな打撃を受け、都市機能はじゅうぶんに回復していなかった。社交ダンスを楽しむための施設もまだ多くなく、また愛好者もそれぞれの生活の再建の途上にあった。社交ダンス愛好者を対象としたメディアを刊行しても、採算がとれると考える勇気ある出版社は、なかっただろう。これが、第一に考慮すべき点である。

もうひとつは、東京・横浜の状況とは対照的に、京阪神では生活レベルの向上もあり、風俗の洋風化の流れも中断されることがなかった。もともとヨーロッパの情勢が不安定だったので、西洋人たちの来日も少なくなかった。そのようななかでダンス熱が高まり、新しい娯楽施設としてダンスホールが設けられていく。震災後は東京・横浜の音楽家やダンス教師・ダンサーたちも京阪神に拠点を移していた。

しかしながら、1927年まで大阪府警察部長をつとめていた小栗一雄（1886～1973）は、それ以前の警視庁保安部長時代からダンス営業に対して厳しく臨んでいたことで知られる人物だった（のちに警視総監となる）。府は、じわじわと増加するダンスホールに対して、府令をもうけて規制するという方針を出した。ホールで飲酒ができないことや、ダンサーに鑑札が交付されることが定められるなど風紀面をいましめる条項はあったものの、数は少なく、おもに建築・設備などについての構造的な条件を設定し、既存のホールが期限までに改装・改築できなければ営業をつづけられなくなる内容のものだった。既設のホールが改修工事などによって構造条件を短期間のうちにクリアすることはむずかしく、店を放棄して別の場所に新築するほかはない。たとえ新築の出願をしたところで却下されるだろうとの予想もあった。飲食と組み合わせた営業ができないとなれば、投資に見あう収入も見込めない。ほとんどのホールにとって営業継続は事実上不可能とみられた。

四月に公布された府令は七月一日から施行され、大阪のダンスホールは多くが閉鎖に追いこまれていく。ところが、厳しい姿勢をとっていた小栗が転任（後任は村井八郎）、ユニオン、パウリスターの2ホールは営業を継続する。新たに府知事となった田邊治通（1878～1950）はホール営業を許容するのか禁圧するのか態度をはっきりさせない。10月末で閉鎖、いや12月まで、とずるずると営業を黙許することになり、混乱をまねいた。けっきょく12月25日をもって閉鎖するとされたのだが、パウリスターはなおも営業をつづけようと裁判を起こす……。

大阪のダンス禁圧事件の経緯については、その後、さまざまなかたちで書かれ、引用さ

れ、転載されてきた。したがって、なかには事実と大きくくいちがう記述も残されている。その点については稿をあらためて論じたい。

1927年という年の大阪のダンス界は、このような状況だった。その時期に刊行されたのが、雑誌『ダンサー』だったのである。

【資料の所在と留意点】

今回掲載する『ダンサー』誌については、資料の所在確認や複写その他に関して、以下の個人、機関にひとかたならぬお世話になった。ここに謝意を表したい。

西村貴久男さん 橋爪節也さん 桃谷和則さん 尼崎市立文化財収蔵庫・尼崎市立地域研究史料館〔2020年10月より尼崎市立歴史博物館〕 熊本県立図書館 国立国会図書館

『ダンサー』第3号は国立国会図書館で閲覧可能である。しかし熊本県立図書館蔵の創刊号は保存の状態を考慮して現在は閲覧に制限が設けられている。デジタル化などの作業が完了するまでの間は、資料の複写などに対応できない可能性もある。また、第2号は個人蔵である。

所蔵館、所有者の現在の事情に配慮するいっぽう、研究の素材をひろく提供するべく、創刊号と第2号については重要部分の翻刻をおこなった。創刊号と第2号については、当面、ここに紹介する目次と記事の翻刻を利用されるよう、おねがいしたい。

また、前の翻刻作業の際と同様、図版については転載や引用をせず、文章による説明にとどめた。

なお、この『ダンサー』誌がこの領域の専門雑誌の最初であるという点については、社交ダンスに関する文献について詳細に研究した村岡貞がふれている（『日本に於ける社交ダンスの変遷史』『社交ダンス講座 第一巻 論説編』春陽堂 1933年 所収、上記の『コレクション [モダン都市文化] 第4巻 ダンスホール』で復刻）。また、林喜代弘もダンスホールの発展衰退を論じた文章のなかで、『ダンサー』の創刊号と第2号とを別々に古書店から入手したことや、以下に翻刻する記事の一部についてふれている（『昭和初年 大阪歓楽街展望』『近代庶民生活誌 第十巻 享楽・性』（南博責任編集）三一書房 1988年 所収）。

【編集者・出版社ほか書誌データ】

第1巻第1号～第1巻第3号〔定価35銭／編輯発行兼印刷人 大野徳太郎（大阪市此花区

大野町 1 丁目17番地)／印刷所 共立印刷所(大阪市東成区中道町320番地 電話 東4227番)／発行所 共立出版社(大阪市南区瓦屋町 5 丁目 3 番地 電話 南5406番)〕

雑誌『ダンサー』の編集部は、上記のとおり大阪市内の瓦屋町にあった共立出版社におかれている。

奥付の「編輯を終わつて」に記載された署名は「N 生」であるが、冊子の最初のほうにおかれた「発刊に際して」という文章には「主幹・宇津信義」と執筆者名が書かれている。この宇津が、実質的な編集長であったと考えられる。宇津は、雑誌『野球界』に学生野球や社会人野球に関する記事があるものの、特定の新聞社で記者をしていたかどうかは確認できていない。しかしながら、創刊にあたってただちに編集を任されたことや、原稿を依頼した人たちの顔ぶれから想定して、雑誌編集の経験や文筆業界・ダンス業界での人脈をもっていた人物だったと思われる。編輯発行兼印刷人の大野徳太郎については明治期に何冊かの本を書いている同姓同名の人物がいるが、調査中である。

刊行元となった共立出版社について詳細はわからない。東京には、共立出版という1926年創立の、おもに理工系の本を刊行する出版社が現存する。しかし、同社の社史『共立出版六十年史』によれば、同社は関東大震災後に東京で創業しており、また刊行した出版物の一覧にも雑誌『ダンサー』の記載がないことから、大阪の共立出版社との関係はないと判断される。

印刷は、おそらく同系列と思われる共立印刷所が担当している。奥付の広告では、商業印刷を得意とする業者であることがわかる。別に、東京に本社をおく共立印刷株式会社も存在するが、こちらも比較的新しい会社であり、『ダンサー』の印刷を担当したとは考えられない。

なお、第1号から第3号までの印刷所、発行所は変更なく、すべて上記のとおりである。

創刊号の告知では、大阪の盛文館、参文社、東京の東海堂、東京堂、そして京都の大盛社が「大売捌所」として紹介された。毎月5日発行、定価35銭の月刊誌で、6ヵ月2円、1年4円での割引購読もできると書かれている。第2号、第3号も35円のままであった。しかしながら、確認できているのは第1号から第3号までで、第4号以降が確認されていない。短命だった可能性が高く、また、現存する冊子の実物も、地域的に離れ、異なったかたちで保管されている。したがって、この雑誌に関してはこれまであまり知られておらず、内容についてじゅうぶんな分析がなされたこともない。

これは、古い時代の出版物、とりわけ風俗や趣味についての雑誌では、めずらしい事態

ではない。だが、のちに東京で刊行された社交ダンス雑誌が収集・保管の対象となり、あるいは学術的に言及される機会が多いのにくらべると、大阪で刊行された雑誌に対する関心は低い。けれども、さきに書いたとおり、関東大震災後の娯楽、とくに洋楽や欧米由来のダンスについては京阪神の事情を無視することはできない。断髪洋装の女性がモダン風俗の象徴となったきっかけのひとつは、『アサヒグラフ』1927年6月8日号に掲載されたグラフ記事「街頭の近代色」であったという。その後、東京では1928（昭和3）年以降、ジャズやダンスが流行し、ダンサーが職業婦人の典型として取りざたされるようになる。ところで、それに先んじて大阪では……。いや、そういった大阪中心主義的な感情に眼を曇らされることなく資料を読んだときに、東京・横浜のモダン風俗の孵卵器としての役目を、京阪神のダンスホールが担っていたことは、否定できないと考える。

だが、京阪神の状況は、これまで個人の評伝や、文学作品での言及など、かぎられたかたちでしか伝えられていなかった。同時代を生きた関係者も、この世を去った。情報の不足を補うための作業は、けっきょく、当時の新聞雑誌をたんねんに読み直すことでしかない。立ち寄った街では必ず古書店をめぐり、古書店から送られてくるカタログをかじりつくように見る。関係者の消息も不明となると、不謹慎な話だが、亡くなった方が残した資料が古書店から売りに出されるのをひたすら待つしかない。それが研究の現実であった。

状況に変化が生じたのは、図書資料のデジタル化・アーカイブ化がすすみ、インターネットによる検索システムが整ってきたことによる。おそらく面識のない人びとがそれぞれに保管していた冊子や、未整理だった端本の書誌情報の登録作業を各地の図書館がすすめた結果、今回紹介する『ダンサー』の3冊も、この場で「邂逅」することができたのだといえる。

1927（昭和2）年

第1巻第1号＝創刊号 1927年4月号（1927年4月3日印刷／4月5日発行）

熊本県立図書館蔵・山崎正董雑誌創刊号コレクション

【目次】

＝よみもの＝

◇巻頭言		1
◇発刊に際して	主幹 宇津信義	2

特別寄稿

民衆娯楽としてのダンス	市立市民館長	志賀志那人	2
春・花・舞踊		寺川 信	6
ダンサーの一風景		杉岡宗三郎	8
舞踊人その他		松浦旅人	10
礼儀を弁へて欲しい	ユニオンダンスホールマネージャー	藤村譲二	26
▼この春の紐育のダンス振り (漫画と漫文)			5
▼シヤリアピンとアンナパヴロバ			7
▼ワンステップ			12
▼芦邊踊と浪花踊の素人評			18
▼麦屋踊の本家			21
◇ホール巡礼 (大阪で一番古いコテージ)			14
◇自殺か他殺か		のぶよし	22
◇或るダンサーが貰った手紙			24

文苑

すみれ (詩)		渡部正直	22
芹 (詩)			23
船室のゼラニウム (詩)			24
ダンスの種々相 (川柳)		庄万よし	13
◇若葉輝く——或るダンサーの話		藤原二郎	26
◇小阪村 (創作)		渡部正直	31
——美しい口絵写真——			
◇アンナベニントンのブラツクボトム			1
◇春の踊 (松竹座)			
天津御空			2
浪花の街			3
◇ダンスと映画女優			4
◇ダンス界の明星			5
◇ホール巡礼… (1)			6
◇ダンス界の恩人			7
◇ステージからホールへ			8
◇ダンスの揺籃時代			9
◇ホール巡礼… (2)			10
◇ホール巡礼… (3)			12
◇芦邊踊と浪花踊			14
◇京都都都どり			16
◇ホール巡礼… (4)			19
◇ダンスと芸者			20
◇表紙		大塚克三	

【創刊号の解題および翻刻】

表紙

表紙は濃い紫の地色で、タイトルの「ダンサー」という文字が金縁で飾られた橙色で印刷されている。タイトルは、英語では「THE DANCER」と記される。表紙には、「創刊号」であること、また1927（昭和2）年の「四月」号であることが示されている。

表紙のデザインを手がけたのは大塚克三（1896～1977）で、大阪を中心に活躍した舞台美術家として知られる。『ダンサー』については、現存する創刊号から第3号までのすべての表紙を担当した。

道頓堀にあった芝居茶屋に生まれ、父・春嶺も画家で、大阪の美術界では重要な存在であった。歌舞伎や文楽人形浄瑠璃の背景だけでなく、現代劇の背景もまかされ、中座や角座だけでなく南座などの舞台もつくっている。京阪だけでなく、戦後は東京や名古屋の劇場でも仕事をした。亡くなるすこし前の1976年には、『大塚克三舞台美術大道具帳』が浪速社から出版された。独立行政法人日本芸術文化振興会の「文化デジタルライブラリー」には、朝日座や国立劇場、国立文楽劇場で、おもに人形浄瑠璃の舞台装置をてがけていた実績が登録されている（2020年6月現在）。関西大学なにわ大阪研究センターによって大塚克三資料の整理・分析もすすめられている。

けれども、その大塚が、どのようないきさつで新雑誌の表紙を描くことになったのかは不明である。上記の『大道具帳』に付された作品年譜でもっとも古いものは1929年の角座の装置である。大塚は、若いころに東京に出て映画のタイトル描きをしていた時期があり、その後、実家に呼び戻されたのち松竹の宣伝部に入社したとある（『大塚克三舞台美術大道具帳』「あとがき」）。したがって、この雑誌の表紙も帰阪後の時期に描いた作と推定される。

表紙に描かれているのは、断髪的女性。耳を隠さず、アイラインや眉も強調されている。唇は、薄い桜色。また、右上には社交ダンスを踊るカップルのカットも添えられる。小さなカットだが重要な意味を伝えている。「ダンサー」といっても、舞台に立ち、客にダンスを見せることをなりわいとする「ステージ・ダンサー」ではない。男性客の相手となって社交ダンスを踊る職業女性であることを、このカットは補足的に説明している。男性はスーツに蝶ネクタイの洋装、女性はショートヘア、ワンピースで、やはり洋装である。洋服を着たカップルが洋楽に合わせて楽しむのが社交ダンスであるという範例を、この表紙は見る者に伝え、ダンサーとは断髪的女性だということを、ことさらに印象づける。ただし、じっさいにダンサーがみな断髪洋装であったとはいえない。それについては、のちほど説

明する。

広告

表紙裏から本文までのあいだ、前付部分の広告に関しては目次に記載がないので、ここではその一部を紹介する。

注目すべきは、1927年の春に営業していたダンスホールの広告が掲出されていることである。雑誌の創刊号では、発刊の支援、おそらくは金銭的な支援をした企業や個人の名を示した広告が掲載される慣例がある。この『ダンサー』についても、そういった「つきあい」から「祝発刊」などと書き添えられた広告が数多くみられる。

表紙裏の広告は三越だが、そのあとに大阪のダンスホールの名前がならぶ。最初が「ユニオンダンス倶楽部」で、南地にあった「ユニオン」が運営していたダンスホールあるいはダンス愛好者のためのクラブの広告とみられる。文字を連ねただけでとくにデザインについて凝ったところのない不愛想なレイアウトだが、コピーには次のように書かれている。

桃色に咲く美しいダンサーが 皆様の御来場を御待ちしてゐます

次が「コテジ」のもので、「健康は運動 運動はダンス ダンスはコテジ」というコピーが、やはり文字だけで表記されている。所在地は「大阪南地 戎橋停留所西一丁」とある。「コテジ」の所在地が現在のどこにあたるのかはわかっていない。なお、この店については、あとでくわしく説明する。

そのあとのページには京都の「ローヤルダンス倶楽部」が発刊祝いの広告を掲出している。「洛陽の春はまた別格 御花見のお帰りに是非一度」というのが売り文句である。所在地は「京都新京極」とだけ書かれている。京都のこの時期のダンスホールに関しても、これまであまり知られていなかったもので、この広告そのものが貴重な情報である。

目次のあとにもダンスホールの広告がある。大阪の「パウリスターダンスホール」(「パウリスタ」とも表記される)で、所在地は「大阪南地戎橋北詰」となっている。「道頓堀に映る紅の灯 春宵を渡る微風は ダンスに好時節であります」と、これも他のホール同様、文字だけを組んだシンプルな体裁をとっている。

先にも述べたとおり、関東大震災のあとの大阪でのダンスホールは人気のピークを迎えていた。しかし、そのいっぽうで、大阪府警察部は、新たな風俗営業であるダンスホールを規制すべく相当な注意を払っていたし、新聞各社も流行現象として注目しつつスキャン

ダルをつかんで記事にしようと取材をすすめていた。

日本では、帝国ホテルのように外国人も利用する宿泊施設や、鹿鳴館など外交のためにつくられた施設、さらにはかなりの資産をもつ個人の私邸に、ダンスのための部屋（英語では ballroom と称される）が設けられた。また音楽については、レコードなどがない時代だったので、軍楽隊や、そこで訓練を受けた市中音楽隊などが雇われ奏楽を担当した。こういった特別な例をのぞいて、一般の人たちが洋楽にあわせて社交ダンスを踊ることは、明治時代のなかばまでは珍しいことであったといえる。来日する欧米人、また外遊する日本人が増加し、洋楽器や楽譜が輸入されるようになって、ようやく社交ダンスも一般に知られる段階を迎える。

日本で商業ダンスホール、すなわち、入場料を払えばダンスを踊ることができる場を提供する施設で、もっとも古いものは、1920（大正9）年3月に開業した鶴見・花月園の舞踏場であるといわれてきた。しかし、花月園舞踏場は、男女の利用客がカップルでつかうことを前提としていた。園内のホテルに宿泊する客や、横浜に居住する外国人たちが遊ぶための場であった。客がひとりで入場したばあいは、他の客を誘って踊るしかなかった。そのため、花月園では園主の妻や娘が、それらの客のパートナーをつとめた。

こういった状況が数年間つづいて、やがて、ダンスの教授所では教師と生徒が踊るようになり、また愛好者の会員制クラブが組織され会員どうしが踊るようになる。さらに、米国から「タクシーダンス・ホール」という業態が輸入された。この経緯については、すでにくわしく書いてきたので、ここでは省略するが、ホールに職業ダンサーをおき、男性の利用客にチケットを購入させてダンスを楽しませるしくみは、函館出身の加藤兵次郎によって、大阪のカフェあるいはバーに持ちこまれたことがわかっている。

職業ダンサーを店で雇い、客にチケットを買わせるかたち、いわゆる「チケット制」の「タクシーダンシング」を最初に導入した店については、戎橋にあった「コテジ」（「コテージ」「コテイジ」「コテヂ」などとも表記される）とする回顧が複数ある。それらは、いくつかの伝聞をもとにして引用あるいは転記されたため、情報の確度が低く信用できない記述も多い。「コテジ」がどういった店で、どういう経緯でタクシーダンス・ホールに転じたのか、その経緯を、まちがいがすくないかたちで理解するために必要なのは、同時代の資料である。

それには、当時、大阪で刊行されていた新聞雑誌を確認することがもっとも手早く、また確実な方法だといえる。しかしながら、大正年間に出されていた『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』それに『大阪時事新報』などの閲覧作業では、いままでのところ、創業時のコ

テジに言及した記事や開業広告を見いだせていない。また、他の新聞は、この期間のものが戦災その他の事情で失われていて、大阪でのダンス普及の経緯を、その時の情報をもとに再構成することがむずかしい。『ダンサー』創刊の前年に、大阪のダンス流行をあつかった『大阪朝日新聞』(1926年6月13日)の記事には、島之内署が「コテジ」ほかのダンサーの身元調査をしたことが記され、「コテジ」もダンスホールだと書かれているが、写真などはない。

ここで紹介している『ダンサー』は1927(昭和2)年発刊ではあるものの、その創刊号には戎橋「コテジ」の広告が掲載されている。また、グラビアページ(目次では「口絵写真」とされている)には店内の写真が掲載され、「よみもの」として同店についての回顧記事も書かれている。東京で刊行されていた書籍や新聞雑誌には、「コテジ」への言及はあっても、その写真や広告を見出すことができなかった。したがって、今回紹介する『ダンサー』誌は、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』などの記事などとともに、日本初のタクシーダンス・ホールといわれた「コテジ」が実在したことを明確に示す資料といってよい。また、第2号、第3号にも「コテジ」についての情報があり、開業の年やタクシーダンス・ホールへの転向のタイミングについての手がかりがあたえられる。ただ、これらをふまえたとしても、創業の正確な時期やダンスホール営業に転じた事情などについては不明な点も残る。けれども、それらについて探索する貴重な情報が満載された雑誌であることは否めない。

口絵

つづいて、口絵として写真ページが20ページにわたって挿みこまれている。本文のページ数が39ページ、そのあとにも広告がつづくので、雑誌全体をみると、ヴィジュアルな要素が多くを占める構成になっている。また、目次では「よみもの」として本文の記事タイトルが先におかれ、あとに「美しい口絵写真」の記事タイトルが並ぶ。ノンブルは、記事、口絵それぞれ別に付されている。ここでも記事、口絵それぞれにページのノンブルを付して解説する。

口絵1ページの最初は「アンナペニントンのブラックボトム」で、踊る男女の写真が掲載されている。米国の女優でダンサーのアン・ペニントン(Ann Pennington, 1893～1971)と俳優で監督やプロデューサーの経験もあるジョージ・ホワイト(George White, 1891～1968)とが、ブラックボトム(Black Bottom)というダンスを踊っているようすだ。おそらくは輸入された雑誌からの転載だろう。

そのすこしあとのページには、松竹座での春の踊に関する情報、日本の映画女優の情報などがつづく。女優とダンサーという職業の近さを感じさせる記述もみられる。そして、その先におかれているのが、現役のダンサーとしてホールで働いている女性たちのポートレートであり、彼女たちの近況である。

「ダンス界の明星」(口絵5ページ)として名をあげられているのは、パウリストアーの古参ダンサー・澤野り子。断髪で洋装、帽子をかぶっている。もともとは舞台女優だったらしい。同じページには、ユニオンのカツミちゃん椅子に座ってポーズをとっている。この人も洋装、断髪で帽子といういでたちである。ダンサーの情報は、その後のページにもふたたび掲載されているが、ここではページ順にしたがって紹介する。

つづく口絵6ページは、「ホール巡礼(1)」で、ユニオンの音楽を担当した「チェリーランドオーケストラ」と、バイオリニストで、このバンドの指揮をとっていた井田一郎(1894~1972)の肖像が最上部に配置されている。井田については多くの研究があるので、ここでは写真が掲載されていることを記すにとどめる。中段には、のちに日本社交舞踏協会などの重職を歴任することになる藤村譲二(浩作、浩という名義も用いていた)と、パートナーのダンサー・砂田駒子が組んで踊っている姿がある。ふたりは、日活映画「心なき都」でも共演したらしい。下段には、パリジヤンの主宰者・山口武雄と、同ホールの「スター」として田本菊子、一ノ瀬幸子、松家久子ら3名のダンサーをふくむ写真があり、一ノ瀬幸子については松竹楽劇部の一期生だったことが書き添えられる。ただし、ダンサーたちは和装である。

つぎの口絵7ページには「ダンス界の恩人」として、ふたりの人物が紹介されている。上段には、加藤兵次郎が(おそらく自宅とみられる場所で)洋装、蝶ネクタイ姿で写っている。キャプションには「日本ダンス界から加藤兵次郎氏の名を忘れる事は出来ない。ダンス今日の隆盛を見るに至った大半は氏の献身的努力に俟つと言つても決して過言ではない。如何に頑強なダンス反対論者も一度氏の風貌人格に接したならば必づやダンス礼賛の真髓に触るゝものがあるであろう。」と書かれている。

加藤兵次郎については、筆者も『にっぽんダンス物語』のなかで評伝を書かせていただき、またご家族とも親しく話をさせていただく機会があった。そのたびに、加藤兵次郎が人格者として認められていたことや、その人柄にひかれてダンスの個人指導を請われる機会が多かったことをうかがっていた。それらの証言とともに、この『ダンサー』創刊号の「ダンス界の恩人」という位置づけは、重く受けとめたい。

また、下段には川邊孝二の肖像写真が配置されている。キャプションには「近くデルモ

ンドと称するホールを開くので、その準備の為め東奔西走、一日として席温まらずと云ふ有様であるが、氏も亦関西ダンス界有数の権威者である。」と書かれている。川邊は、のち、藤村らと渡満し、大陸へのダンスの普及にもかかわる人物である。

目次では「ステージからホールへ」とあるが、口絵8ページには「舞台からホールへ」とあり、天華一座からパウリストターのダンサーとなった鈴木花枝、浪華少女歌劇から帝国キネマなどを経て四ツ橋ホールのダンサーに転じた椿恵美子、オペラの経験もある歌手出身で北パリジヤンに在籍中だった佐藤君代らの姿が並ぶ。初期のダンスホールで男性客の相手をつとめる職業ダンサーが、さまざまな前職から移ってきたことがわかる。ここでは、佐藤君代だけが和装である。

口絵9ページ「揺籃時代の回顧」(目次では「ダンスの揺籃時代」)におかれている写真は、関西のダンサーに関する情報でも古く、かなり貴重なものといえる。上段の写真は春日井初代の洋装姿。「春日井初代さんはダンスを思ひ切つて いまは神戸上筒井にカフェー、青い鳥を開いてゐる」とある。ダンサーとして働き、成功したあかつきには、この春日井のように自分の店(おもに飲食店)をもつことが目標とされていたようだ。下段には、この春日井をはさんで立木笑子と桂環のふたりが写っている。三人とも和装で、キャプションには以下のように書かれている。

或る時はホールに草履が降つて来た、或る時は灰皿が頭に命中してダンサーが負傷した、あらゆる迫害と冷笑と漫罵の中に建設の苦楚を嘗めつくした此の三君の涙ぐましい昔物語も今は知らない人が多くなつた。

加藤兵次郎や藤村譲二、川邊孝二ら男性のダンス関係者とはちがひ、日本の商業ダンスホール黎明期にかかわった女性たち、とくにダンサーのことはほとんど知られていなかった。『ダンサー』誌は、日本の社交ダンス専門誌の嚆矢であるばかりか、日本初の職業ダンサーたちのプロフィールを伝える貴重な情報源でもある。

つづく口絵10ページおよび口絵11ページは見開きの「ホール巡礼(2)」で、神戸の教授所および大阪の営業ダンスホールが写真とともに紹介されている。また口絵12ページ、13ページも同様に見開きで「ホール巡礼(3)」として大阪の4つの営業ホールが写真を添えて紹介されている。雑誌『ダンサー』創刊号の資料としての重要性は、上記の加藤、藤村、ダンサーの春日井ら大正期に活躍した人物をとりあげていること、そして、この口絵10ページから13ページで、その時期のホールの店内写真を掲載していることにある。同時期の

新聞にも、ホール内を撮影した写真が掲載されていることはあるが、縮刷版やマイクロフィルムのかたちで保存されているため、写真はあまり鮮明ではない。また、取材した記者がかならずしもダンスにくわしいとはかぎらず、事実関係を正確に伝えているかうたがわしい点もある。それらの写真や記事にくらべると、『ダンサー』の口絵写真は上質であり、キャプションもそれぞれに付されている。これらの情報は、のちほど紹介する京都のホールの紹介もふくめ、第一級の資料といって過言ではない。

では、口絵10ページから順に解説していこう。10ページには上段に神戸三宮の「帝国社交舞踏学館エンパイア」が紹介される。高垣清之進という、滞米経験があり、その際「紐育舞踏師範学校」でダンスを修得した人が主宰する教授所である。ページ上部にはエンパイアのフロアでダンスを習う男女の写真が、またページ右には、高垣と、おそらくはニューヨークのダンス学校で撮影した女性と組んで踊っている写真が添えられる。この教授所については、上記の玉置真吉「社交ダンス十年の想ひで」にも記載されていたが、詳細が不明だったものだ。本文30ページには、この教授所の「助教師」として花岡愛子の断髪洋装の全身写真が掲載されている。

次が大阪梅田新道の「パリジヤン」である。当時、パリジヤンには北と南の2店があり、梅田新道のほうは北パリジヤンとも呼ばれていた。ページ下部に見開きでホール内のダンサー席の写真があり、10名のダンサーが被写体になっている。和装が2名、洋装が8名という割合だ。そのうちのひとり中野時子が「先日自動車が電柱に衝突して瀕死の重傷を負った」というような説明がある。見開き上部に写真が配置されているのが北浜「シヤンレー」である。北浜ビルの5階に入居していた合同組合のかたちのホールだったらしい。ホールが「鍵なり」すなわちL字型だったので、初心者練習を分けることができたのであろう、メインフロアでダンスを楽しむ客の邪魔にならない点がよいとコメントされている。こちらもダンサー席が写されていて、14名の身体が写りこんでいるが、レイアウトの関係で一部がトリミングされている。全身が写っている12名についていうと、和装が8名、洋装が4名という割合だ。また、ダンサー席の背後にバンド席もあって、壁面にはローマ字2段で「SHANLEY JAZZBAND」とあり、その下に、読みとりづらいが右から「サクラビール」の文字が見える。広告を兼ねて寄贈された舞台幕であろう。バンドマンは4～5名が写っているが、譜面台などに隠されて楽器や表情などは確認がむずかしい。

そして、ついにこの創刊号の白眉ともいえる、口絵12～13ページの見開きとなる。

ここでは大阪淡路町の「新海亭」、衣笠町の「中央倶楽部」、四ツ橋の「オリエンタル」、そして南地「コテヂ〔ママ〕」が紹介される。白眉、という表現はいささか大げさに思われ

るかもしれないが、コテジの内部写真やダンサーの鮮明な写真は、これまでの調査で他に見つけることができなかったのも、その点で貴重なものであることはまちがいない。

12ページ右中の新海亭の写真は男女2組のみが写った小さなものだ。添えられているキャプションに興味深い記述がある。「キヤメラを向けると如何したものかダンサー諸君がコソ〔くの字点〕逃げ出してしふ、頼んでも出てくれない、羹に懲りて膾を吹いたのだらう。」——これは、おそらく他の新聞等の取材の際に撮影に応じたダンサーや客が、その後、さまざまに噂を立てられたか、あるいは実際に困難な目にあったであろうことを推察させる文だ。

これと呼応するように、13ページ左下にあるコテジの説明文にはこうある。

大阪ダンス界の草分け大正八年の創業である 詳細はホール見物記を読みたい、此処も写真となると逃げ出すのでだまし討をやつたら、御気の毒にもビックリした顔がそのまゝに写つてしまつた

コテジの開業やダンス営業への転向への経緯について書かれた「ホール見物記」は、のちに記事の全文を翻刻したので参照されたい。ここでは、写真を撮ろうとしたらダンサーが逃げ出したので「だまし討」にした、という点に注意したい。上記の新海亭でもそうだったが、ダンサーや利用客は、写真撮影についてかなり神経質になっていた。それは、この時期に、大阪の各紙が、ダンスホール営業について厳しい論調で責めたてていたからであり、ダンサーたちは本人も、あるいはその家族も、好奇の目を向けられ、非難の言葉を浴びせられていた可能性が高い。また、ホールの経営者たちも、メディアの取材を警戒していただろう。宣伝になるかもしれないが、また悪評を書かれてはたまらない、というようなスタンスだったにちがいない。

そのようななかで、雑誌『ダンサー』は、むしろホール側、ダンサーたちを擁護する目的で刊行されている。しかし、創刊に向けての取材段階では、そのことは伝わりにくい。他の新聞同様、うまいことをいって取材や撮影だけを済ませたら、あとは書きたい放題書かれてしまうかもしれない。そういった懸念がホール関係者にはあったのだろう。ダンサーや客がカメラを向けられると逃げていくというのは、そういった事態をよく伝えている。翻刻を掲載した「発刊に際して」でも、主幹の宇津が、取材時の撮影「拒絶」の事情を書いている。

だからこそ、これら草創期のダンスホールの内部写真やダンサーあるいは男性客の姿を

収めた写真資料は希少なものであるともいえる。この創刊号が熊本県立図書館に、いや山崎コレクションとして保存されていなかったら、おそらくはわからなかった事実が、口絵から数多く読みとれる。

さて、このコテジの店内写真では、7名のダンサーが写っている。たしかに、何人かは発光に驚いてのことだろう、不意をつかれたような表情をしていて、また、逃げようとしたのか、あるいは顔を隠そうとしたのか、動かし腕がブレてしまったダンサーもいる。だが、女性たちの服装はよく撮れている。写っている7名すべてが和装。髪型は、短くしているか結い上げるかして、パーマネントウェーブをあてているかどうかはわからないものの、いずれも耳が出るていどの長さにとどまる。着物も派手な柄もあれば、地味なものもあってさまざまだが、花柳界の舞台でみるような豪華な印象のものは着ていない。草履の裏が写っているのだが、それらが、ダンスフロアで踊りやすくするためにフェルトなどを貼った専用の「ダンス草履」なのかどうかは判断できない。1930年代になると百貨店がダンス草履を取り扱っていたことがわかる広告が新聞に掲載されるので、そういった商品を一般の女性も購入して踊ることができたのだが、この1927年という時点で販売されていたかどうかは、はっきりとわからない。

コテジの写真の解説が長くなった。残りのホールについても書いておこう。中央倶楽部は、大江ビルの地下で営業していた。大江ビルは葛野壮一郎が設計し1921（大正10）年に竣工した本格的なビルで、現存する。その「中央大ホールをボールルームにしたのだから恐らく日本一と云つて差支へない」と評価されている。新聞で積極的にダンサー募集の広告を出していたこともあり、キャプションには「ダンサーも三十有幾名、実に堂々たるものである」。被写体となったダンサーは9名、うち和装が8名、洋装1名である。ダンサー席のうしろにあるバンド席も写っており、おそらく9名編成、楽器はグランドピアノ、ドラム、ギター、それに金管楽器をもつ3名までは判別できる。

四ツ橋のオリエンタルは、大阪朝報という新聞社と同じビルに入居していたらしい。そのため、「新聞社も痛し痒しだらう」とのコメントがある。ただ、このホールについてはその後の情報があまりない。写真には、前方の確認できる位置で5組のカップルがダンスを踊っている。男性はみな洋装。相手の女性たちは、4名が和装で1名だけが洋装である。

口絵ページは、このあと、花街の行事についてページを割いている。大阪の芦辺踊や浪花踊、京都の都をどりなどである。これら花街の事情については、いずれ別の機会にふれることにして、ここでは省略する。

口絵18～19ページは、やはり見開きで京都のダンスホールについて写真入りで紹介して

いる。「ホール巡礼 (4)」ということになる。

18ページ上は、川端の「アケボノ」。「切符が安いので大入満員」だ、と好況ぶりが伝えられる。組んでいる男女の服装がはっきりと写っているカップルはかざられているが、写っている女性たち5名は、いずれも和装である。その下に添えられた写真は、望月京子という少女が父親と踊る姿である。これもアケボノで撮影されたもので、この少女は「御両親やお姉さんと共に稽古して」いたと書かれている。父親と思われる男性は洋装、そして、少女も洋装である。両ページにまたがって下段には京極「ローヤル」のダンサー席の写真がおかれている。「立派さに於て、広さに於て、京都一番」という評価だが、ホール内のようすがわかる写真ではない。写っているダンサーたちは11名で、うち6名が和装、5名が洋装だ。

さいごは木屋町「京都ホール」。2枚組の写真で、1枚はダンサー席とバンド席。ダンサーは和装、洋装それぞれ5名ずつ。それに男性教師と思われる人物が端に座る。バンドは6名、アップライトのピアノのようだ。もう1枚はホールで踊るカップルたちを撮影したものだが、うち1組は、和装の女性どうして踊っている。

なお、この京都のダンスホールの事情、とりわけ、カフェーなどの業態からどういうふうにダンスホールが分派したのかという点については、斎藤光『幻の「カフェー」時代 夜の京都のモダニズム』（淡交社）で詳述されている。

最後は口絵20ページ「芸妓とダンス」（目次では「ダンスと芸者」）で、桂家の久壽の横顔が掲載されている。この芸妓は「ダンス好き」と説明され、キャプションには興味深いことが短く記される。

取締や役員が懸命になつて防止に努めたがダンス熱は何の容捨〔ママ〕もなく色街に侵入して行く

ダンスホールに行く客の階級の変化を物語るもので、此頃のように高くは安月給取りや部屋住はホールには近寄れない。

「取締」とあるのは、警察による取り締まりのことではなく、「色街」の組織におかれた役職の可能性がある。役員たちがいくら止めようとしても、ダンスが「色街」に入ることは止められなかった、という記述。記事では、ダンスホールの利用料金が高騰したことにより、客が安価な「色町」に流れ、そこで芸妓たちと踊ったという解釈を示している。しかし、このころの京阪の花街は、押し寄せる西洋化の波にのまれ、営業形態を変えようと

模索していた時期にあたる。これも別稿でふれることにするが、芸妓が社交ダンスのレッスンを受けて客の求めに応じてパートナーをつとめられるようにしたり、洋装の「ダンス芸妓」が登場したりと、伝統的な花街が西洋化をすすめる現象もあった。つまり、社交ダンスの楽しみが一般社会に普及していく過程においては、舶来の西洋文化と伝統的な花街とが「対立」したわけではなく、両者がそれぞれに歩み寄っていくようすが見られるのだ。

これは、さきに示したダンサーたちの写真にも関連づけて検討すべき点である。社交ダンスを踊るホール専属の職業ダンサーは、はじめのうち大半が和装だったことがわかる。たしかに洋装で断髪、のちに「モダン・ガール」と称されることになる新しい女性の容姿のイメージにちかい姿を写真に残したダンサーもいるのだが、いっぽうで、髪の毛は短くまとめて、着物を着て、草履を履いたダンサーが、洋服を着こんだ男性客と組んで踊るというかたちが一般的だったと認められる。

ダンサーは、私たちが現代からふりかえっていただく「モダン・ガール」のイメージに強く関連づけられ、断髪・洋装であったはずだと決めつけてきたところがある。じじつ、この『ダンサー』創刊号の表紙に大塚克三が描いたダンサーも、まさしくそのイメージどおりである。けれども、実態としては、1927年の段階ではダンサーの多くが和服を着ていた。これは、同じ時期の新聞に掲載された写真などからも確認できる。もちろん、帝国ホテルなどで開催されたダンスパーティでは、女性たちもドレスを着ている。だが、断髪ではなく、束髪など日本髪と洋髪の間隔的なスタイルのものだといえる（さらに写真やイラストなどでの確認作業が必要だが）。鹿鳴館以来の上流の国際交流などでは、イブニングドレスを着て洋風の髪型にととのえた女性が社交ダンスを踊る習慣をたもっていたが、彼女たちはけっして「モダン・ガール」ではなかった。そして、「断髪」の若い女性がダンスを踊りはじめるのは、大阪で営業ダンスホールが開かれて、しばらくたってからのことだったといえよう。この点については、拙稿「ダンサーたちの風貌 「銀座のモガ」以前」（現代風俗研究会東京の会編『現代風俗学研究』第19号 一般社団法人現代風俗研究会 2019年）も参照されたい。

このように、前付の部分だけでも、当時の大阪のダンス界や繁華街のようすをうかがい知るための貴重な情報にあふれている。

本文

翻刻 ダンサー創刊号 巻頭言 [筆者不詳]

外国から来たものは何でも排斥する人がある。外国から来たものに何かよい所があると無□〔理カ〕な詮議をしてそれは日本にも昔からあつたと云はねば承知の出来ぬ人もある。外国から来たものは何でも真似たくてたまらぬ人もある。あちらこちらの佳い所をまぜ合せて立派なものを拵へると云ふ手品師のやうな人もある。

日本の人はなぜもつと平気でものを見られないのだらうか。有りの俥に見、有りの俥に考へ、その通りに実行した所で国の滅びるやうなものは滅多にない。国を滅すやうな悪いものはその国の滅びると共にとうに滅んでゐる。遙々海を越え〔江〕て日本までもやつて来る気遣はまづあるまい。大概なものは放つておいて健全な国民の選択に委すれば残るものはひとりでに残り滅びるものはひとりでに滅びる。

ダンスだつてそうである。国民道徳とか風紀衛生とかいろんな方面から今更兎や角言つてゐるのは耳かくし髪を兎や角言つた程につまらない。法律やサアベルに遠慮せず流行するものは勝手に流行つて留められない。私共はダンスの効能をのべ立てはしない。然し若いものは勿論分別盛りの人々までダンス熱に罹つてゐることを認める。その流行は実にもやみ難い勢である。

流行の力は怖ろしいものである。素人義太夫が一寸流行すると云へば大阪近在に師匠を取つたものが八万人あつたと云ふ。一時は学校で蛇蝎のやうにきらつた活動写真が遂には学校の教材になるまで発達流行してゐる。ダンスはおそらくキネマに劣らぬ流行力を持つてゐる。ダンスファンはキネマファン以上の数を占めてゐる。

私共はこの勢にあるダンスをこのまゝに受け容れる。よいも悪いも詮議せぬ。育つものなら育て、も差支へないと信ずる。お面お小手のお株を奪ひ今や青年男女を熱狂せしめてゐる外国スポーツを排斥しない日本人々はダンスに対しても公平な態度を持して貰ひたい。そして踊つて見たら如何です。ダンスの世界も別に変つたものじゃない。特別に浮いた事不徳な事のみがその世界を支配してはゐない。やはり世間なみであると云ふ事が判りませう。

翻刻 発刊に際して 主幹 宇津信義

天の邪悪は何んでも小理窟〔ママ〕をつけて一度は必ず反対する、反対しないと自分の估〔ママ〕券に係ると思つてゐる、曾て彼等は活動写真が渡来した時もカフエーや女給が出来た時も道学者流を振り廻して社会風教の賊として攻撃した 今又、ダンス亡国論を振り廻してゐる。

ダンスで亡びる国ならダンスをやらなくても亡びる、今更盆踊りや大漁踊の例を引き出すまでも無い 手近い処で酒興に乗じて芸者の三味線や太鼓で『ヤツチヨロマカセ』でも踊るのと大差無く三味や太鼓がオーケストラに代つたまで、〔ママ〕である。

此の種の人は、今のダンスホールやカフエーが悉く撃剣柔道の道場になつて到る処で撃竹刀の音を聞き木刀長刀を帶した会社銀行帰りの青年や商家の子女が大道を闊歩したら国家安泰と心得てゐるのだらうか。

ダンスが思想善導を第一義として生れ出たかの如く考へての根本論議が既に間違つてゐる、スポーツは病気をなほす病院ではない、ホールは教会堂でも無ければ学校でもない、愉快に遊ぶ処だ、尼さんや女学生をダンサーに仕立て、修道院や高等女学校がダンスホールを経営したら、大いに国民思想の廢頹を嘆くべきである。

水や火が人畜を害するからと云つて之れを人間生活から取り去ることは出来ない、多形的美醜を見て直に中味を断じる事も最も危険である、曾て或ダンサーが客と待ち合せて戎橋を南へ行つたから彼は必ず南海沿線の待合に行つて淫売するだらうと上官に上申し一警官があつてその暴論を驚いたこ

とがあつた。

ダンス取締規則が発表された、取締ることに異存はないが、ダンスの真意を体〔ママ〕せずして、只取締るためにのみ都合のよい官憲の御便利主義に立脚した取締規則は往〔往カ〕々にして解釈の相違による間違いを生じ易く危険である、現に、早くも、所轄警察によつて寛厳手心の片手落ちに不満の声を耳にしてゐる。

何故、官憲の御都合のみが法規となつて民衆の希望が無視せらるゝか、云ふまでもなく、その希望を表示する統一された言論機関が無いからである。

営利を目的とするダンスホール経営者個々の具申は結極兄弟相囀むに等しく、踊る人達の声は要するに犬の遠吠へに過ぎない、新聞雑誌は数多いが、彼らは徒にホールの塵をホゼリ出すのみで、ダンスの健全な発達を阻害こそすれ、頼むに足らない 本誌発刊に際して写真撮影に各ホールを巡回した時も、或は撮影を拒絶せられ、或は羹に懲りて膾を吹くダンサーも客もコソコソ〔くの字点〕と逃げ出す者が多かつた、如此写真に対して神経過敏にしたのは新聞社の罪であるが、彼等自らが職業を恥ぢ客がホールに来てゐることを恐るやうではダンスの健全な発達は望まれない。

即ち本誌発刊の目的は今過度〔ママ〕期に迷ふソーシャルダンスの健全なる発達を期すると共に統一せる言論機関たらんとして呱呱の声を揚げたものである。

これら「巻頭言」や「発刊に際して」に書かれていることを読めば、当時の京阪神で社交ダンスを踊る人たちが増え、また営業ダンスホールがにぎわっていたことがわかる。そして、警察による取締りや新聞による批判が強くなり、追いつめられた状況に陥っていたことも理解できよう。そういった状況を打破するために出版されたのが、この専門誌だったのである。

大正期の大阪は、いまでいう社会福祉の充実期にあった。そのなかで活躍したキリスト者のひとりが志賀志那人（しが・しなと 1892～1938）である。志賀は、のちに大阪市社会部長となるのだが、その前に市立北市民館の館長をつとめていた。その立場で書かれたのが、本文2ページからの「民衆娯楽としてのダンス」であり、目次では「特別寄稿」とされている。

志賀はまず、女子もふくめて若い世代のスポーツを推奨する。しかし、文部省は競技スポーツへの学生の参加に消極的だ。かぎられた一部の学生が専門的に競技に参加するいっぽうで、「カフエ漁りや活動写真熱に浮かされ」る「青白い顔をした連中」が増えるとすれば、これは「一種の社会問題」だ、と前置きする。

そして、盆踊りに話題を転じ、これを日本在来の社交とスポーツを兼ねたものだという。しかし、当時は盆踊りで男女間の風紀の乱れがあることが問題視されていた。志賀は、公娼制度があり、芸妓を認めておきながら、盆踊りを取り締まるアンバランスにも苦言を呈する。そして、「踊ることは人間の本能である。多数の男女が一所〔ママ〕に踊ることは人間の社会的本能である。それを抑圧することは容易に出来ない抑へれば抑へる程弊害が伴

ひ、むしろそれを公許したために起る弊害よりも大きいものがあるかも知れない」とつづっている。

農村の土の上で悠長に行われる盆踊りが都市生活に浸透するのはむずかしい。それにくらべれば「ダンスホールのダンスは将来発展の勢恐るべきである」。このような見通しをもっていた志賀は、ムッソリーニがイタリア国内のダンスホールを「征伐」しはじめたという報道にふれ「尤もな事」と賛意を示す。そして、友人の前でダンスの攻撃をしていたところ、ひとりの「ダンス通」に「一度ダンスを見た上で議論したまへ」とたしなめられる。その友人に案内され、志賀は、此花踊と、ダンスホールとの両方を見に出かけた。廓の踊は「ステージダンスとしてやはり大阪に保存されるべき大切なもの」だという感想を書くとともに、ダンスホールで「幾十組の男女が下手か上手か私には判らぬが静に行儀よく踊つてゐるのを見て此の花踊以上に感心した」。

このとき志賀が見物したホールがどこなのか、推定はできない。しかし、職業ダンサーを相手に踊る男性客ばかりでなく、夫婦連れで遊びに来ていた客もふくまれるホールだったらしい。「紳士淑女と云ひたいが、それよりもつと一般的である。ドレスやタキシードなどきてゐるものではなくて洋服ならば背広が多く、銘仙の着物にフエルト草履そこらで自転車をおりて着た厚司がけの小僧さん角帯前垂の番頭さん大島に袴と云ふいで立ちもある」と、多様な客が楽しんでいる姿に、感銘を受けたようだ。そして、志賀は、このホールのようすを故郷の盆踊りと重ねあわせた。そのあとにつづく、最後の段落の一部を抜粋しておく。

当局がダンスホールの取締に就いて相当苦心してゐるのも尤もな話である。もしどんだん〔くの字点〕許可したら見てゐる間に農村の盆踊式に全市を踊の渦に巻きこんで了うに相違ない。ダンスを以て我々と一寸の関係もない外国通や資本家や上流階級の人々は或は浮は気な男女ばかりの限られたる不徳な一小範囲にのみ行はれるものと思つてゐる訳には往かぬ。結果や実質のよしあしを論ずる迄もなくダンスがこれ丈けに民衆化してゐる今日それを禁止したり抑圧したりするときはとても容易ではあるまい。小僧踊り番頭踊り女中踊り給仕女踊り紳士も淑女も踊る。踊らぬものは制服と警官と軍人と役人丈になるかも知れない。〔後略〕

志賀は、男女が踊るという点で盆踊りも社交ダンスも同じだと考え、そこに弊害があらうとも、流行を止めることはできないと考えた。志賀の観察どおり、大阪のダンスは隆盛

を迎えた。しかし、志賀の意見に反し、警察はダンスホールの営業を禁止する方向で動いていく。これについては、第2号以降の記事に関する解説でもふれていきたい。

創刊号の記事で注目すべきは、やはり「ホール巡礼 大阪で一番古いコテジ」であろう。これについては、以下に翻刻する。

翻刻 ホール巡礼 大阪で一番古いコテジ

入口を這入ると頭のツルリと見事に禿げたお爺さんが据〔ひか〕へてゐた、『お靴を一寸……』と磨いてくれる、靴の裏の破れを気にしながら磨いて貰ふ、台の上に五銭白銅五六枚ならべてある、チップは御遠慮に及びませんと云ふ舌代らしい、ホールマネージャー君とボーイ君がお客様より上等な洋服を着てニコヤカに迎へる、幫間式ワザとらしさが無いだけに感じがいい、『教授匡正、仁村教授』の大額がホールの大きさに比例しない、仁村教授とはイリス商会の吉岡氏の事である。

此のホールは大阪で一番古い、ダンスホールとなつたのは大正八年だが、その以前コテジバー時代から主人の高島立雄氏が商売上手で給仕女に外人を使用し金髪パーで売り出してゐたので、その外人連中が蓄音機に浮れて女同士でテーブルとテーブルの併んでゐる狭い間で踊つてゐた、その内に外国から帰つて来たと云ふやうな連中がやつて来る様になり、服部某と云ふ男が夫婦連れで詰切つて踊り出す、トウトウ〔くの字点〕中央のテーブルをかたづけて、好事家の興にまかせた、今坂妻スタジオの俳優となつてゐる近藤伊與吉の女房で口をぬぐつてゐる三島洋子も山田よし子を名乗つて当時此処の女給兼ダンサーをしてゐた。

今大阪で踊つてゐる相当古顔は男も女も大抵このホールで産声をあげてゐるが、兎も角その頃から今日の隆盛を見るに到るまで官邊の圧迫、世間の風評と闘つて来た高島氏は確に大阪ダンス発達史上忘れる事の出来ない功労者と云はねばならない。

現在ダンサーは九人あるが、春江さんと云ふのは主人の姻戚関係で殆ど此のホール開始以来の古顔で、南パリジヤンの小泉松子さんも元コテジにゐた人で、此の二人が関西に於けるダンサーの最古参者である。

此処は蓄音機だが、流石に古いだけにレコードの数も多い、ホールが狭いから新府令によつて何とせなければ六月三十日までの寿命である。

レコードが微妙の旋律を伝える、思ひ思ひ〔くの字点〕にダンサーと踊り出す、此処のダンサーは主人の好みか総体に地味で他のホールの様に絢爛目もあざむくキラビやかなのはゐない 上手な人は時たまにしか来ないそうだ、成程、ドレも之も下手だ、中風患者か熱病を患つた様な格構でヨチヨチ〔くの字点〕やつてゐる足許ばかり見て、遠慮なく逆戻りをやるので到る処で追突や正面衝突それでも『失礼と』『ママ』挨拶してゐるのはダンサーばかり男の方は知らぬ顔で行き過ぎるのも現代式か、府令によると大きなホールに集注して取締上の便宜のみを考慮してゐる様だが、コテージ〔ママ〕の様な小さいホールも許して一種の研究道場もあつていいと思ふ。

コテジの名は全国的に可成有名である、孤軍奮闘兎も角ダンスの一地歩を築き得た高島高〔ママ〕雄の建〔ママ〕闘は感謝せねばならない。

此頃どこのホールも大抵主人はダンスをやらない人が多いのでダンスの上手な人を頼んでホールをマネージさしてゐるが、之等の人は単にダンスだけを教へずに運動競技でも、遊戯でも必ず無ければならない精神的教育もほどこして貰ひたい 別にダンスの礼儀と云ふなら、或は風俗習慣のことなる外国の遊戯だから難かしいと云ふこともあるが、ソナナ難かしい問題ではなく、只多勢の人が一堂に集合した時の礼儀、即ち公衆道徳と云つた様なもので沢山で殆ど常識に近いものである。

高島立雄については、コテジの営業にたずさわった人物であるということのほか、多くはわかっていない。この記事につづいて投稿記事や文芸欄あるが、内容の説明は省略する。編集後記に相当する「編輯を終わつて」を以下に翻刻する。

翻刻 編輯を終わつて

本誌発刊の話があつたのは三月の初旬でした、それから一瀉千里足許から鳥がたつ様に、発刊手続、保証金の納附、類似題名の登録手続等を終つて愈々雑誌の編輯に着手したのは三月の中ば過ぎ、遂に発行が十日遅れて終つた。何分前例が無い雑誌である処へ、新聞雑誌と来ると極端に神経を尖らしてゐるホール経営者及ダンサー諸嬢、写真撮影の了解を得るまで本誌発刊の趣意の説明に少なからぬ時間が掛つて仲々骨が折れた。

『味方になつて大いにダンスの宣伝をしてやろうと云ふのじやないか、お互に持ちつ持たれつぢやないか……………』

と心に思つても腹を立てゝもゐられない、此の創刊号を読まれたら次号からは進んでホールやダンサー側から材料を提供して戴きたいものである。漸く桜が綻び始めた、本誌発刊祝賀会が灘萬食堂に開催せらるゝ頃は定めし、花の便りに満都の人の心が浮き立つてゐる頃であらう。謹で読者諸君の御健在を祈る。 編輯室より N 生

裏表紙は南本町堺筋の「ヒツジ屋本店」の広告でカラー印刷。月夜の道を歩いているのだろうか、断髪、洋装の女性が扇をもっている姿が描かれている。「婦人子供服地 技芸材料毛糸」と取扱商品が添え書きされている。

第1巻第2号 1927年5月号 (1927年5月3日印刷／5月5日発行)

個人蔵

【目次】

＝よみもの＝

◇巻頭言		1
◇社交ダンスとダンス営業	主幹 宇津信義	2
特別寄稿		
千年前にあつた我国の社交ダンス	寺川 信	2
外国のダンスホール	加藤兵次郎	6
記憶	マルタ	8
あゝわたし狂舞曲が踊りたいわ	川上僅子	26
▼映画に教へられた礼儀作法 (漫画と漫文)		5
▼チャールストン練習場 (漫画)		9

▼ワンステツプ		13
▼甲南倶楽部ホール開き		15
▼呉越共鳴		22
▼管弦楽の今昔		28
◇ホール巡礼（北パリジャン）		10
◇北陽浪花踊見物記		18
◇非礼四ツ橋ホール	宇津信義	16
◇本誌発刊祝賀会記		20
文苑		
旅の吹笛（詩）	渡部正直	24
	（絵） 宇崎純一	
大阪の夜（詩）	全上	30
◇若葉輝く——成〔或カ〕ダンサーの話（2）	藤原二郎	32
◇恋の放送（創作）	加藤龍門	37
——美しい口絵写真——		
◇戸川美智子さん		1
◇駒菊の瀕死の白鳥		2
◇森静子の鷺娘		3
◇ユニオン（澤子、五月、勝美）		4
◇加藤兵次郎氏と砂田駒子さん		4
◇妖艶水鳥葉子さん		5
◇川邊孝二氏と山中絹子さん		5
◇川上児童楽劇団		6
◇松竹座の河合ダンス		7
◇ブラックボットムの型		8
◇北パリジャン（慶子、時子、照子）		10
◇村田健氏		11
◇山本美智子さん		11
◇花田愛子さんと鈴木夏江さん		12
◇ルポーフさんと矢野芳子さん		13
◇南パリジャン		14
◇芸妓からダンサーへ		15
◇函館のダンスホール		16
◇大阪社交ダンス倶楽部		18
◇諸星集る		20
◇本誌発刊祝賀会		22
◇里勇さんと福若さん		24
◇表紙	大塚克三	

【第2号の解題および翻刻】

表紙

表紙は、創刊号と同じく大塚克三が描いている。第2号については、7～8組の男女が混雑したホールで踊る姿がコミカルに配されている。中央のカップルは、男性が白髪交じりの洋装で、パートナーは断髪だが紫色の着物をまとっている。イヤリングやブレスレットなどの装飾品も身に着けていて、和洋折衷の姿だ。他の男性も洋装。女性ではっきりと洋装と判別できるのが2名、和装と判別できるのが1名、残りは画角の関係で不詳としておく。

広告

表紙から目次までのあいだの前付では、南パリジャンと北パリジャンの広告が見開きで掲出されている。創刊号とちがって、踊る男女のイラストをあしらったしゃれたデザイン
の広告である。文字部分だけ書き出すと、以下のとおりである。

唯一の世界的社交機関として隔意なき国際交誼を結び国威を発揚し我国を世界的に向上さすそれはダンスをおいて他に方法を見出し得ません。

当パリジャンは過古〔ママ〕二年間是れが宣伝と普及に微力を尽して来ましたが現在のホールでは余りに狭隘にすぎますので近々上品で感じの好いホールを建築することになりました

此の新しいパリジャンの出現は必ずや皆様の御期待を裏切るものでないことを確信致して居ります。

何卒倍旧の御愛顧を……………

南パリジャン ダンシングホール 南区戎橋北ノ辻西ニ入ル 電話南三九二番

新府令に対応して新築する意向が示されている。南パリジャンの所在地も現在どこにあたるのか不詳だが、別の記事には「南区新屋敷」と表記されているものもある。

日本一のジャズバンド 上品で感じのいいホール

初歩の方は専属の教師が丁寧に教へします

北パリジャン ダンスホール 梅田新道大平ビルデング地下室

口絵

目次と広告に口絵写真がつづく構成は、創刊号と同じである。口絵1ページは「パウリスター」のダンサー戸川美智子の和装写真。「洋服を着ない処に性格の一端が覗はれる」とある。口絵2ページは河合ダンスのスターだった駒菊が「瀕死の白鳥」の衣装をまとったときの肖像、3ページは映画「鷺娘」で日本舞踊を見せる女優の森静子だ。

その先に、ダンスホール関連の情報がつづく。口絵4ページにはユニオンのダンサー森澤子、小佐井五月、市原勝美の3名が洋装で。ただ、髪型は短いとしかいえない。またその下には加藤兵次郎が日活の女優・砂田駒子と踊る写真がある。加藤・砂田ペアはいずれも洋装。口絵5ページは、北パリジヤンのダンサー水島葉子の断髪洋装の写真。下には山中絹子と踊る川邊孝二。この号は舞台の風景も収められており、口絵7ページには川上貞奴がかかわった川上児童楽劇団の浪花座の場面写真が3葉、口絵8ページには松竹座での河合ダンスの公演写真が2葉。

ダンス雑誌が販路をひろげるためには、新しいダンス、あるいは新しいバリエーションの紹介や解説が必須の要素であった。2号では口絵8～9ページの見開きをつかって新ダンス「ブラックボトム」が10葉の連続写真で詳細に説明されている。米国で流行したダンスも、現地の雑誌などで紹介されれば、輸入されてすぐ日本の媒体に転載されていた。著作権などについてはまだ厳格に考えられていなかったころならでのことである。

このあとは、ふたたびダンスホールとダンサーの情報となる。口絵10ページと11ページは北パリジヤンの関係者で占められている。10ページにはダンサー前田慶子、中野時子、田淵照子の3名。田淵照子だけが和装、中野時子はチャイナドレス風の詰襟に見える。3名とも髪は短い。11ページは同店のホールマネージャーをつとめる村田健で「中溝ダンス塾出身、大阪ダンス界の最古参者の一人」と記されている。中溝ダンス塾について詳細はわからない。下段にはダンサーの山本美智子のサイン入り全身写真。千鶴みどりの芸名で映画女優をしていたときに撮影されたものらしい。サインは千鶴姓に読める。洋装だが髪の毛は肩までの長さで、帽子をかぶり、ハンドバッグを持っている。和傘（日傘）をさしているのも、当時の定番のポーズといえそうだ。しかし、この「緑なす黒髪に未練もなし、プツツリ断つてダンサーとなつた」と付記されている。

口絵12ページには、創刊号でエンパイアの「助教師」として紹介されていた花田愛子が再登場している。「流石に場所柄、洋装の好がシツクリ身について美しい」という評は、神戸のホールの女性だから洋服を着るときのセンスがよい、という意だろう。下段はパウリスターの鈴木夏江。

13ページ上段には、同じパウリスターのダンサーとしてか、あるいは教師としてかは明記されていないが、ルボーフの全身写真がある。ルボーフは1910（明治43）年の夏に來日したセルビア出身の女性で、各地でステージダンスの公演をしたのち、ダンスを教えて生計を立てていたと考えられる。ルボーフにダンスを習ったことがあるという回顧は文献資料でも散見され、のちに來日するエリアナ・パヴロバと同じく、日本での洋舞の普及において重要な役割を果たしたひとりである。ルボーフの写真は全身で、もちろん洋装、断髪で帽子をかぶっている。やはり洋傘（日傘）を手をしている。セルビア出身の女性が大阪のダンスホールで働いている、というのが世界大戦後のヨーロッパの不安定な状況の反映であることには留意しておきたい。また、ルボーフは、『日本の興行師は悪い人が多いです、私随分瞞されました』と述べていたという。「來朝既に十一年、歳、四十を越した彼女の述懐は痛々しい」とある。この「來朝」のタイミングは上記の記録（『都新聞』1910年7月4日）とは齟齬がある。

13ページ下段には、コテジの矢野芳子。和装だが、断髪で、耳ははっきりと出ている。コテジのダンサーの単独の写真はたいへん珍しい。

つづく口絵14ページは、南パリジヤンの関係者の集合写真。同店を率いる山口武雄と、大杉榮三の男性2名。あとは8名の女性ダンサーが並ぶ（芸名は屋号や姓がなく、初子、清子、久子、松子、廣子、愛子、文子、高子とのみ記載されている）。髪は短いものの、全員が和装である。15ページは、目次では「芸妓からダンサーへ」とある。同一人物の写真が2葉、比較できるように並べられている。大きな羽子板をもった和装で日本髪を結った姿のものと、その髪をおさげにしてドレスを着た姿のものである。北パリジヤンの赤川敏子は、宗右衛門町の伊丹幸（いたこう）の満壽奴として座敷をつとめていた。「高髷を三つ組おさげに結び替へて因習の衣をぬぎ捨てた」と書かれている。芸妓や舞妓からの転業の例である。このような人の流れの点でも、伝統的花街と新興のダンスホールとは必ずしも敵対的とはいえない関係にあったといえる。ページはとぶが、口絵24ページには、里勇と福若のふたりがダンスを踊る芸妓として紹介されており、「芸者にダンスを禁ずること」はできない、と書く。

口絵16～17ページの見開きは、「函館のホール」（目次では「函館のダンスホール」）を紹介する3葉の写真で、17ページ左上に加藤兵次郎の肖像、見開き中央に加藤の社交ダンス仲間の集合記念写真が配置されている。おそらく加藤が欧米視察から帰国したあと、1921（大正10）年夏に組織した「函館社交舞踏会」という同好会のものと推定される。加藤が函館の自邸にダンスホールを設け、会員制の同好会をつくった経緯は、現地の『函館毎日

新聞』や『函館日日新聞』などでもくわしく報じられていたが、鮮明な写真はこれまで見つかっていなかった。加藤は関東大震災後、大阪、神戸、宝塚などを拠点としてダンスの普及を試みたが、1940年にホール営業が禁圧されると家族とともに中国大陆に移住した。そして、敗戦後の帰国の際にほとんどの家財を失ったという。そのなかには、3度の海外旅行で撮影した写真、故郷函館の家屋や友人たちの写真などもふくまれていた。そのため、この『ダンサー』2号に掲載されているものは函館にも残されておらず、非常に貴重なものといえる。

とくに下段の16ページ寄りにレイアウトされた写真は、函館の自邸（のちに平塚邸となり、現在は神社に移築）のなかに設けられたボールルームである。建築当時の内部を撮影した写真もほかにはなく、日本の社交ダンスの歴史を語る際には欠かせない1枚だといえる。『ダンサー』の編輯者も、加藤に敬意を払うとともに、「京阪神今日の隆盛を以つてしても之だけ立派なホールは見出すことはまづ困難」と書く。

函館で加藤が社交ダンスの同好会をつくったように、京阪神でも愛好者の団体は大正年間からじょじょに創設されていた。そのひとつ、「大阪社交ダンス倶楽部」が口絵18～19ページに見開きで紹介されている。いずれも集合写真で詳細は略すが、キャプションによれば、この倶楽部は1926（大正15）年6月に西九条青年会館で発会式を挙行了た、とある。また、中央におかれた写真は、夜の屋外で撮影されたものと考えられるのだが、これも添え書きによると六甲山で開催された「観月舞踏会」ということだ。とすれば、都市部にダンスホールが開業するようになったのと同じころ、すなわち公的な規制がかかる前の段階では、屋外で社交ダンスを踊る人たちがいたということになる。大阪や尼崎で刊行されていた別のダンス雑誌などによると、生駒山で屋外ダンスパーティが開催されたことや、宝塚会館に設けられた屋外舞踏場では夏の納涼のために、期間をかぎって屋外ダンスが認められていたことがわかっている。しかし、そのような規制のもとでの例外的な企画ではなく、同好会の催しとして屋外でのダンスがなされたことは、やはり重要な事実といえる。

口絵20ページから23ページまでは、見開きをもちいて『ダンサー』誌の発刊祝賀会（1927年4月14日、会場は戎橋の灘萬）のもようが伝えられている。のちに日本ダンス界の重鎮となる人物が集まっただけでなく、南北パリジャン、新海亭、ユニオンのダンサーら15名、それに南地の芸妓で「ダンス好き」の8名が参加した。社交ダンスの社会的意義をアピールし、ダンスホールやダンサーに向けられている冷ややかな視線を、いくらかでも理解あるものに変えようという気もちからだろう、弁護士や新聞記者、医師なども招待され挨拶に立っている。なお、この祝賀会については、本文の記事でも詳報されている。

口絵24ページについては、上でふれたとおりである。

さて、創刊号に写真が掲載されたダンサーたちの多くが和装だったのにくらべると、2号では洋装姿のものが増えている印象を受ける。洋装のダンサーを選んでメディアが掲載したのかもしれないし、自分の写真がメディアに出ることを知ったことでダンサーが洋装を志向したのかもしれない。また、口絵などの写真で傾向を推しはかる際には、留意すべき点もある。ダンスホール内で営業中、営業時間前後に撮影された写真は、ダンサーがはたらいているときの衣装とみなすことができる。けれども、屋外で撮影された集合写真などで和装が多いのは、当時の女性たちが日常的に和装だったから当然のことでもある。自宅や通勤途中は和装で、ホールに出て踊る前にドレスに着替えるような生活だったとすれば、屋外のダンサーの写真が和装に傾くことはあるだろう。屋外、たとえば繁華街の路上を断髪洋装で闊歩するというのは、たとえ職業ダンサーであっても、まだこの時期には勇気のいることだったにちがいない。だからこそ、ホール内でも和装を貫くダンサーが、1927年の段階では多数派だったと考えられる。この状況が変化するのは、もうすこしあとのことだろう。

本文

本文の最初におかれている「巻頭言」では高山樗牛が1912（明治45）年に博文館から刊行した『文は人なり』から「年若き人よ」の一節が引用されている。

その後には特別寄稿や、よみもの、海外からの短信、文芸作品などがつづく。大別すると、ダンサーの回顧やエッセイ（マルタ「記憶」、川上謹子「あゝわたし^{マヅルカ}狂舞曲を踊りたいわ」）、国内各地のダンスホール開業の動きや、それに対する課税や取締についての情報（「ワンステップ」「甲南倶楽部ホール開き」）、花柳界の舞台評（「北陽浪花踊」）、アメリカのダンス事情（「チャールストン練習場」）や音楽情報（「管弦楽の今昔」）など、短い記事、囲み記事などで、誌面に変化をあたえている。

文芸では、藤原二郎の小説「若葉輝く」の連載2回め、加藤龍門の「恋の放送」などの作品が並んでいるが、渡邊正直の詩「旅の吹笛」が掲載された24～25ページ、「大阪の夜」の30～31ページには、いずれも見開きで宇崎純一（うざき・すみかず 1889～1954）の挿画がある。いうまでもなく、宇崎は、「大阪の夢二」として人気の高い画家である。なお、第2号の本文中に挿入された広告に大阪割烹学校編『家庭で出来るコックテールの作り方』の刊行を告知するものがあり、この発行元が波屋書房である。同店は現在も料理関係書の専門店として南海通で営業している。宇崎に挿画を依頼した際に、当時、弟・祥二が経営

していた波屋の広告も掲出する話になったのかもしれない。

いずれの記事、寄稿にも興味は尽きないが、ここではダンスホール関連で重要なものだけをいくつか翻刻しておきたい。主幹の宇津がしるした文章からは、当時の大阪のダンスホール営業をとりまく状況が読みとれる。また、そのあとの加藤が記者に語った話には、米国のチケット制の導入の経緯がふくまれる。

翻刻 社交ダンスとダンス営業 主幹 宇津信義

本誌の発刊が刺激となつて大朝大毎等の大新聞を始めとして大小新聞悉くが云ひ合せた様にダンス記事を掲げて花柳欄にかへようとする傾向が見え〔江〕て来た。

之はダンス普及と云ふ上に於て甚だ喜ぶべき事であるが、現在京阪神で営業してゐる営利的ダンスホールのみによつて教育せられ、ソーシャルダンス本来の意義に無智な新聞記者の筆に、芸娼妓と同じ様に取扱はれるダンス記事なるものが果してソーシャルダンスの健全なる普及発達に資するか今遽に賛成の辞を呈し難いものがある。

去る〔1927年〕四月十四日本誌発刊祝賀会に際して私の言つた開会の辞を大阪今日新聞は翌日の朝刊にそのまゝ直訳して『府令に反対の氣勢をあげて生れ出た』雑誌であると三段抜見出して掲載してゐた、今日紙は大いにダンスと本誌発刊を皮肉つた積り（料理が一円であると書いた無礼は敢てとがめない）であつたらうが的をはづれた擲楯は駄洒落にもならない、寧ろ新聞記者のソーシャルダンスに対する無智の暴露として、此の筆法を以つてする今後の新聞ダンス記事を憂慮するに余りあるものであつた。

祝賀会参会者の総てが既に踊る人であるとしての辞であつたために或は言簡に過ぎて素人には言葉の皮相しか解らなかつたかも知れないが『ダンスの健全なる発達』と言つたのはダンスホールの発達を意味するものではなくソーシャルダンスの健全なる発達の意味であつて只ダンスを愛好するが故に峻厳撲滅に近き府令に対抗しやうと云ふのは無い、営利を目的とするダンスホールの取締は勿論賛成であるが、府当局が只営業ダンスホールを目的に草案した規則であるために、営業にあらざる例へば家庭で舞踏会をやる時だとか或は外国人の歓迎舞踏会だとかつまり営利を目的としないダンスをも同じ取締規則で取締らうとしてゐる、即ちソーシャルダンス本来の意義をも滅却する規則には反対であると云ふ意味なのである。

最も慎重であるべき府当局でさへ社交的ダンスと営利的ダンスを混同したのだから現在大阪にあるダンスホールのみによつてダンスを知れる新聞記者の過りは敢てとがむべきでは無いが新聞記事の反響は府令のそれよりも甚大であるから徒に記者個人の感情と営業政策に災さるゝ処なく公平な立場から、ソーシャルダンスの核心に触るゝものがあつて愆しいものである。

某友人がホール経営の為にダンサーを募集し、その練習を自宅で行つてゐると附近交番の巡査が来て規則に触るゝ故を以つて中止を命じた、友人は不得已練習を打ち切つたが数日後蓄音機をかけてゐると前日の警官が再び這入つて来た 見ると家族が相集まつてダンス曲をかけて聞いてゐるだけだつたので聊かテレ気味であつたのだらうが其警官は蓄音機をかけることをも禁止して帰つたそうである。

規則の為の規則は遂に罪なき忠実なる警官を色盲患者として此の非常識を敢てせしむるに到つた寧ろ噴飯に値する挿話である

宇津は、加藤兵次郎の薫陶を受けたのだろう、タクシーダンス・ホールは本来の社交ダンスの意義をそこねる可能性がある業態であり、風俗営業として一定の取締りのもとにおかれることを否定しない。しかし、家庭でのダンスや外国人と交際するときの舞踏会まで規制下におくのは過剰であると考えていたようだ。

翻刻 外国のダンスホール 加藤兵次郎氏談

〔記者による説明文〕

陽炎立ち昇る、或る温い日曜日、記者は社交ダンス界の一大権威者として、動もすれば墮落淫逸に流れやうとするソーシヤルダンスの廓清に献身的努力を続けてゐられる加藤兵次郎氏を天下茶屋のお宅に訪れた。

そして氏が曾て一年有余半に渉りダンス研究と視察に欧米各地を歴訪された時の御話を承つた、次に綴つたのは、そのお話の一端に過ぎない、以後号を追つて『加藤氏のお話』を連載することにするが、ソーシヤルダンスを哲学化した、ダンスと宗教論は実に堂々たる論説である、期して次号を待たれたい。(一記者)

〔加藤の談話〕

現今京阪神のダンスホールがやつてゐる切符制度は、私が米国から持つて帰つた切符を見てコテジの主人が真似たのが始りです、尤も米国で切符制度にしてゐる処は大抵倶楽部ですから、ダンサーも極めて自由で、昼はタイピストだとか女事務員を勤めてゐる人が内職に踊つてゐるのが多く、今日は踊り度いとか、小使〔ママ〕が少し慾しいとか思つたら、何処でも自分の好きな倶楽部へ出掛け『今日は踊る』旨を申し出ると、其の倶楽部から小さなマークを貸してくれる、それでもう其の倶楽部のダンサーなのです。

ダンサーはホールに隣接した控室にゐてバンドが鳴りだすとホールへ出て来て、『テイケット、テイケット』と呼びながら客の前を通る、踊ろうと思ふ客は、その時ダンサーに切符を渡して踊ると云ふ順序になつてゐます

だからダンサーは何時でもマークを返して切符の割戻は勿論その日勘定で貰つて、帰りたい時に帰つて行くと云ふことになつてゐます。

教へるのは、そう云ふ一般的の場所では無く別に四方の壁を鏡で張り詰めた部屋があつて、そこに一人づゝ入れ、時間を定めて教へてゐます。

自分が教へて貰つた後で人の教わるのを見学することも許されないで『貴方は済んだのだからお帰りなさい』と云はれて了ふ、時間は非常に厳格で、定められた自分の時間に遅れると、もう其の日は教へてくれません。

私は独逸に行つた時も、或るダンス教授所に通ひましたが、三日目か四日目かに五分遅刻した為、どう頼んでも入れてくれなかつたことがありました。

ホールは何処も立派なものです、キヤバレーは食堂とダンスホールを兼ねたもので、ダンサーはゐても、それはステージダンスを踊るだけで客を相手には踊りません、客が勝手に自分の連れて来た女と踊るので、食事最中でもジャズが鳴り出すと、ナイフもホークもホーリ出して踊つてゐます、医学上から云つても決して害にはならないそうです。

最も感化〔心カ〕したのは劇場内にダンスホールが設けてあることで、退屈な長い幕間をダンスをやりながら待つと云ふ趣向は非常に面白いと思ひました。(文責在記者)

翻刻 ホール巡礼 独歩の境地に行く 北パリジャン [筆者不詳]

大阪府令施行で寿命の短くなつたホールが沢山出来たが同じ六月三十日迄の命でも廃業して惜しいものと惜しくないものとある。

その惜しいもの、内の一つとして本号では大阪唯一の地下室ホール北パリジャンを拉し来つて組上の魚とする。

此処は云ふ迄もなく南パリジャンの分身であつて経営者は南パリジャン主山口武雄氏の長兄、内北浜に扇商として古い老舗を誇る吉井吉右衛門氏で、ホールのマネージャーは斯界の宿老、村田健氏が任じてゐる

書き遅れたが場所は梅田に近い新道交叉点角大平ビルデングの地下室に在る、ウツカリすると入口が解らないが、正面の入口を遠慮しないでツカツカ〔くの字点〕とエレベーターの処まで行く、運転手が乗るのか、ナとハンドルに手を掛けた処をエレベーターに乗らないでその背後に廻ると一つの穴がある、此の穴の口は甚だ貧弱だが一歩階段を下りると其処は誠に不夜城の感あり、紅白造花の桜爛漫として覆ひかぶさり、交響楽の狂音がグリーン〔ママ〕色のカーテンを突き破つて流れ二十四間道路改修中の梅田新道の暗黒と余りにその差がひどいのに驚くだろう。

階段を降り切るまでは食堂の客かホールの客か解らない 足が一寸右方に向ふとイラッシャイの聲が機械的に響き、赤の椽〔縁カ〕付き濃緑色の背広服、此処のボーイ諸君は概して感じがよい チツプに、拘泥せず金銭に、露骨で無いのは推賞に値ひする

床板は随分金がかゝつてゐるのと手入れが行きとゞいてゐるので立派なことは恐らく大阪第一であらう、照明は先づ申分無いが只地下室の悲しさは風通しが悪い、その為めばかりでもあるまいが、頭上から押へつけられる様で長くゐると頭が痛くなる

管弦団は元天勝にゐた哇布〔布哇カ〕人の一団で悪かろう筈は無いのだが聊か鶏を裂くに牛刀を用ひた感じが無いでもない 過ぎたるは及ばざるにしかず鼓膜を突く響音〔ママ〕に慚からず疲労を感じ蓄音機が鳴りだすと客もダンサーもホツとした色が漂ふ、椅子はダンスホールの意義に添はない、

高い踊り代で客をセレクトする方針をとつてゐるがユニオンのそのの如くブル階級の茶屋遊び気分には墮せず相当踊る人が出入りするので従つてダンサーも上手になるし気品も保つことが出来る 實際金に屈托の無い不良老年程手におへないものはない。

昼は研究時間となつてゐるが芸者の練習生が多く村田森田両師範が大汗で引張つてゐるのも場所柄か客に新聞記者の多いのも土地の関係からであらう。

此頃盛んに小野川越君等が先頭で大毎野球団の連中が来るが天下の大投手もダンスホールでは花柳界程にもてないのも面白い社会相であらう 何んと云つても現今ダンスホールでの寵児は映画俳優である。

ダンサーは目下二十名程ゐるが概して名手が揃つてゐる先づ第一に指を屈するのに上海帰りのマリちゃんがある、古い人では時ちゃん君ちゃん、新進では久美ちゃん、政ちゃん、千鶴ちゃん、その他、葉ちゃん潤ちゃん、美智ちゃん、すみちゃんの名も忘れることは出来ない。

六月三十日以後はどうするか、これは目下の急務であるが、株式組織とし、近郊の空地を買収して新しいホールを建設する準備が既に出来てゐるそうであるから、新しいパリジャンが出来たら再び本欄で紹介することゝする。

本文記事としては、このほか「戎橋灘萬樓上に於ける 本誌発刊祝賀会」や、この祝賀会に参加したダンサーと芸妓のようすを伝える「呉越共鳴」など興味深いものがある。発刊祝賀会は、編集部が600名を招待したのに対して240～250通の出席の返信があったとい

う。しかし、4月14日の午前はいにくの雨天で、ダンスホールや花街の営業時間を避ける配慮が裏目に出て集まりが悪いかに見えた。しかし、正午からの祝賀会は、267名が参加して開催された。冒頭、主幹の宇津から挨拶があり、その後、日本大学・法政大学で教える法学士・廣井辰次郎、大阪・日本橋北詰の産婦人科医・飯島貫一がダンスを擁護するスピーチを行なった。来会者はさまざまで、新聞記者、弁護士、会社員、銀行員、画家、小説家、俳優から警官までもが出席したという。最後は、川柳の庄萬よしが万歳を三唱して、約3時間に及ぶ会は閉じられた。

このように、雑誌を創刊することと、その雑誌の発刊祝賀会を開催することをとおして、ダンス関係者だけでなく、メディアをとおして一般社会に社交ダンスの意義をひろめ、大阪府に対しては規制を再考するよう促す意図があったと思われる。編集部では、第3号の発行前の5月26日の夜に「講演と映画の夕」というイベントを開催すると告知している。会場は朝日会館の公演場で、登壇予定者として沖野岩三郎の名があげられている。沖野は、自分の著作である『星は乱れ飛ぶ』が帝国キネマによって1924年に映画化されており、その映画を上映するとともに、説明者として沖野が話をするという計画だった。関連するので、編集後記に相当する「編集室より」を翻刻しておく。

翻刻 編集室より [筆者不詳]

創刊号が遅れたので順送りに遅れて了つた何とも申訳がない、本文の原稿には何等心配をしないが口絵写真の蒐集には尠からぬ苦心を払ふ、ヤツト材料が揃つて銅版へ廻した頃には、他の雑誌は次の月が出てゐるのだからウンザリせざるを得ない。

本号は口絵が四頁増して二十四頁となり、本文が六頁増して四十五頁となつた、第三号には今の倍大としやうと云ふ計画がある。

三号雑誌になるのではないかと云つて心配してくれた人もある、スタートが余り派手過ぎる、モット地味に徐々に進んだ方がよいと注意してくれた友人もある。

皆、本誌の前途を思つての忠言である 肝銘すべきであるが安心してくれ給へ。

そう云ふ声を聞く度に益々体内に血湧くを覚え〔江〕る、反感では無い 何とかして期待を裏切るまいと思ふからである。

来る二十六日は第一回事業として朝日会館で『映画と音楽と舞踊の夕』を主催する事になつた、文人沖野岩三郎氏が自ら、自分原作の映画の説明をする、その原作のモデルとなつた主人公石井漠氏と女主人公小金井みどり女史の二人が親しく舞踊と音楽に出演する、何と興味深いものでは無いか。

今度の財界の変動に聊か痛手を蒙つたが、精神一到何事かである、愛読者諸君幸に安堵して可なりであらう、御健在を祈る。UNS 生

なお、奥付以降の広告では、裏表紙のヒツジ屋本店のものが目を惹く。断髪的女性が鮮やかな黄色の帽子と同じ色の洋服、手袋を身に着けている上半身のイラストである。

第1巻第3号 1927年6月号（1927年6月3日印刷／6月5日発行）

国立国会図書館蔵

【目次】

＝よみもの＝

◇村井警察部長の御賢慮を希ふ	主幹	宇津信義	2
◇ダンスと各新聞記事			2

特別記事

◇国家社会政策からダンスを奨励した独逸		加藤兵次郎	6
◇私の見た『ダンスホール』		安藤生	10
◇米国民をしてダンスの国民たらしめよ		カルヴィン・テイ・ライアン	22
◇私の社交ダンス愚見		藤村浩作	26
▼社会学実習（漫画と漫文）			5
▼ワンステップ			13
▼近代化されたギリシヤダンス			18
▼ユニオンの大御所			19
▼北バリジヤンを訪れたフレスノ野球団			19
▼読者からの希望			20
▼講演と映画の夕記			21
▼ダンスゴシップ			22
▼宝塚のテイダンス			25
◇七十歳のシヨウがタンゴの稽古			16
◇来月一日から如何なる			28
◇ダンス講座 一九二七年度の新しいワルツ			34

文苑

五月の雨（詩）		渡部正直	1
名無草（詩）		齋藤 勇	30
	絵	竹中しづか	
奈良の夕（詩）		渡部正直	32
	絵	宇崎純一	
◇若葉輝く＝或るダンサーの話（3）		藤原二郎	38
◇赤き睡蓮（長編小説）		山上貞一	43
	挿絵	大塚克三	

＝美しい口絵写真＝

◇松竹座のエリアナバヴロヴァ			1
◇まりちゃん			2
◇酒井米子さん			3
◇富田屋の三代丸さん			4

◇夏川静江さん	5
◇愛ちゃん	6
◇光川氏とルボーフ君	6
◇森孝子さんと千種百合子さん	7
◇一色千代子さん	8
◇澤野るり子さん	9
◇歌子さんと美代子さん	10
◇久美ちゃん	10
◇相良千鶴子さん	11
◇数枝さんと八重ちゃん	11
◇ユニオンの想ひ出	12
◇ヴァレンシヤの型	14
◇良風美俗の破壊者	16
◇山口豊氏	17
◇大澤芳子さん	18
◇市原勝美さん	19
◇吉村善次氏と岡田時彦氏	20
◇花柳千栄さんと小泉松子さん	21
◇最後の大会	22
◇文子さんと久ちゃん	23
◇枚方の美代子さん	23
大和家の喜代三さん	24
◇表紙	大塚克三

第3号については国会図書館の所蔵分であるため、上記のとおり目次を紹介したうえで、解題と翻刻については重要な記事などにかぎっておく。

表紙

第3号の表紙も大塚克三によって描かれている。裸体の女性が薄い布をまとっただけという大胆な図柄であり、ダンスホールのイメージというよりは、ステージダンスの一シーンを思わせる。

広告

表紙の裏は、三越呉服店の広告。

その次のページにおかれているのは、「甲南倶楽部」の広告である。場所は、阪急の夙

川。宣伝文句には「新緑深き甲南の辺 夙川沿ひの涼風を受け 夏の踊場に最もふさはし」とある。「初歩の方へ叮嚀に教へます」とつづき、加藤兵次郎が月曜と水曜の担当、藤村浩作が火・木・金・土曜の担当であることが示される。レッスン料にあたる「教授料」は、1回券が3円、10回券が25銭という設定だ。また、出張教授は2時間で15円とされている。

次にすすむと、右ページに「南パリジヤンダンシングホール」、左に「北パリジヤンダンスホール」の広告が見開きで並んでいる。

第3号は、これまでとちがひ、目次をはさんでふたたび広告がおかれている。南地・宗右衛門町の「竹梅」、北浜の「トミヤ」とつづき、口絵写真の前のページは、「コテジ」である。

コテジの広告には、こうある。

開設以来満十年、御馴染深いコテジも愈々御別れの日が来ました。

想ひ出多い皆様によつて淋しく廃れ行く此の老ホールの最後を賑やかに飾つてやつて下さい。

コテジ 南区難波新地 電話南二〇四番

これはコテジの閉店告知であり、これまで情報不足で実態がよくつかめていなかった店についての重要な情報で、1917（大正6）年の創業であるらしいことも推測できる。創刊号の記事によれば、おそらく、コテジはその後、1919（大正8）年ごろから店の女性従業員にダンサーのようなサービスをさせるようになったのだろう。ダンスホール営業をしていたといっても、バーの女性従業員が客の求めに応じてダンスの相手をつとめるという、明確にタクシーダンス・ホールだとはいひがたい過渡的な業態といえる。この点については、『大阪毎日新聞』1927年3月18日の記事で、大阪府警察部長の小栗が市内のダンスホールを「お忍び」で視察したという記事で、貴社の取材に応じたコテジの「主人」が、「私共では大正八年まだ日本にダンス・レコードのない時分からバーの御客に無料でをどつていたゞいて」とあることにも符合する。

そのコテジがタクシーダンスのしくみを導入するのは、加藤が函館から大阪に拠点を移したあとことだから、関東大震災後、1923年から1924年にかけて、ということになる。加藤じしんが第2号のインタビュー記事のなかで「現今京阪神のダンスホールがやつてゐる切符制度は、私が米国から持つて帰つた切符を見てコテジの主人が真似たのが始りです」と述べている。おそらく、これがコテジをチケット制ダンスホールのはじまりとする根拠

として、また当事者の証言として、もっとも古く、信頼できるものと思われる。

これらを勘案すれば、コテジはバーとして1917年に創業し、まもなく女性従業員と客とのダンスをさせるようになり、関東大震災後の1923年の終わりから1924年にかけてのいつかの時点でチケット制度を導入し、日本ではじめてのタクシーダンス・ホールに転じた、ということのようだ。コテジが廃業にいたったのは、前述のとおり大阪府の新規制に対応できなかったからだと考えられる。本文17ページの小さな記事には、コテジで「後進指導」にあたっていた吉岡威夫が2か月の予定で渡米しダンス界の視察に出る予定だと記されている。「個人の商用を兼ね」た旅行であると添えられているので、コテジの従業員というわけではなさそうだ。大阪のホール閉鎖という事態に、関係者たちもしばらく様子見をせざるをえなかったといえる。

口絵

口絵1ページは松竹座で「ユージットとアンフエルメの首」に出演した際のエリアナ・パヴロバである。添えられた説明には「ステージ、ソーシャル共に我国ダンス界の恩人として、その名を聞いてさえ〔江〕懐しさを覚へます」とある。エリアナ・パヴロバ(1897?～1941)に関しては、彼女が社交ダンスを教えて家族の生活を支えていたことや、鞭をつかって矯正するきびしい指導をしたこと、バレエ出身だったために現在のような踵から歩くダンスではなく爪先に体重をかける技法だったことなどが知られている。

口絵2ページは北パリジャンのダンサー・まりちゃん。洋装で断髪、ネックレスとブレスレットを着用。3ページは日活の女優・酒井米子で、大阪まで出かけてきてユニオンでダンスの練習をしている、との添え書き。口絵4ページは、富田屋(とんだや)の三代丸で、芸妓として踊りの素養もあるが、ダンスも早く上達したと書かれている。チャイナドレスを着ており、髪はうしろでくくって耳を出している。5ページは日活の女優・夏川静江。夏川も、ダンス関係の記事でよくとりあげられる人物である。

口絵6ページ上段は、南パリジャンの高田愛子。和装の肖像写真。下段は、前にも名前が出たパウリスターのルボーフと、中央倶楽部の光川が組んでいる写真である。ルボーフについては「いまパウリスターにダンサーとして敗残の余生を送る、薄幸なセルビヤ人」との説明がある。7ページ上段は映画女優の千種百合子で、下段はコテジのダンサー・森秀子(目次では孝子)で、舞台女優だったらしく、ピエロのような服装をして濃い化粧をして写っている。

口絵8ページと9ページは1ページに1名ずつのダンサー大写真で、最初がパウリスタ

ーの一世千代子、同じくパウリスターの澤野り子。いずれも洋装である。10ページ11ページには3名ずつ6名がレイアウトされる。10ページ上からパウリスターの山野歌子で、映画出演時の和装姿。中段は、中央倶楽部の高野美代子で、女優から新聞記者を経てのダンサー勤めとのこと。和装の肖像写真である。下段は北パリジャンの久美子（目次では久美ちゃん）。お下げで和装。

11ページに移り、上段は新海亭の相良千鶴子。洋装である。中段が中央倶楽部の川崎数枝、下段がパウリスターの柴田八重子（目次では八重ちゃん）で、このふたりも和装。柴田は、榎本演劇研究所の出身だが、舞台を捨ててダンサーになったようだ。

口絵12～13ページには、これも社交ダンス史では重要な写真と説明が掲載されている。「ユニオンの想ひ出」と題された見開きである。この記事には、ユニオンが二階の食堂をキャバレー形式にして、女給を「急造ダンサーに仕立て、自由に客の踊るに委ねた」のが、1926（大正15）年のクリスマスだったと記されている。上段にはその際に撮影された記念写真があり、20名ほどの男女が写っている。この「急造ダンサー」はほぼすべて和装にみえる。ユニオンは、その後、加藤兵次郎と藤村譲二とがマネージャーとなり、「兎角の風評の絶へなかつたダンサーの品性を向上せしめ」た、とある。「大阪で一番下品と噂されたホールは一躍、一番上品なダンスホールとして称賛さるゝに至つた」。ここでも、加藤の尽力に敬意が払われている。その後、ユニオンは50名以上のダンサーを擁するまでに繁昌し、編集部では過去と比較できるよう「現在」（1927年当時）の写真を用意して、これも掲載されている。写っているダンサーは24名、うち和装は2名のみになっている。ダンサーの背後にはチェリーランド・オーケストラと思われる7名の男性がいる。

また、口絵13ページには、1926（大正15）年に夕刊大阪新聞が堺大浜において開催したイベント「芝居とキネ〔子〕マ博覧会」の余興として社交ダンスの宣伝をした際の写真2葉が並んでいる。上段は、洋装の女性どうしの複数组が舞台でデモンストレーションをしている写真、彼女たちと、おそらくバンドマンらしき男性や、ユニオンの関係者が列車に乗っている写真もある。

その後は、「ヴァレンシヤ」というニューヨークのダンスの踊り方を説明した「ダンス講座」が見開き5枚組の写真とともにあり、17ページにはドラムを叩く山口豊の姿がある。

このふたつの記事のあいだ配置された16～17ページの見開きは「良風美俗の破壊者」として大和家、富田屋、伊丹幸の芸妓たちが座敷で伝統的な遊び方をしている場面と、畳の上で社交ダンスを踊っているところとを対比して紹介する写真である。キャプションには、「日本古来の良風美俗は、無残や猥褻なダンスの為に侵害せられ、三味線オーケストラの

伴奏でチャールストンのさんざめき不景気風吹き荒む色街……」とある。「良風美俗の破壊者」という言葉を誰を指すためにつかっているのかが明確ではないが、多分、伝統的な花街で遊びつつも社交ダンスの流行に乗じて芸舞妓に抱きつくなどの行為に及ぶような客のふるまい、すなわち理想的な交際術としての社交ダンスとはほど遠いもちいられたかを非難しているものと考えられる。したがって、写真で紹介されている南地の芸妓たちは、むしろ、きちんとした社交ダンスを修得しようとしている点で評価されているのだろう。ただし、その真意ははかりかねる。この写真はむしろ、伝統的な花街のなかに西洋風の社交ダンスが強くはいりこんでいたことの証左として意味をもつ。

口絵18ページは中央倶楽部の大澤芳子で、元舞台女優だったらしい。19ページはユニオンの市原勝美で、ふたりとも和装で立ち姿の写真である。市原はユニオンに古くからいたようで、「鹿子絞り結綿に赤前だれ、食卓の受持ちの間を盗んでリノリユームの床で踊った頃を思ひ出した勝ちやんは、『あの頃は面白かつたわ』とシンミリした調子で云つた」との回顧が添えられている。専用ダンスホールのフロアは、板をはりワックスがけをして手入れをする。欧米のホールでは、靴をはいて踊るのが前提であるから、当然そのようにつくられる。日本の建築関係者も、海外のホールを模してつくるばあいは、そのように設計・施工しただろう。リノリウムの床だった、ということは、ユニオンがもともとダンスを踊るための施設としてつくられたのではなかったことを物語る。

口絵20ページは洋装の男性が2名。上段は吉村善次という人物で、「江川ダンダ〔ママ〕塾の第二期生で外国の雑誌を沢山取り寄せて新しいステップの研究に没頭してゐる」という。ブックダンス時代にあつては、金銭的な余裕があつて海外の情報をとりよせることができればアマチュアでも優位に立てた。下段は、日活の岡田時彦で、ホールによく出入りしていたようだ。21ページは和装の女性2名。上段は花柳千栄子（目次では千榮）で、ダンスを捨ててマキノプロに転じたらしいことが付記されている。

口絵21ページ下段の小泉松子は、南パリジヤンのダンサーだが、以前コテジに在籍したことがあるとされているので、キャプションを全文、引いておく。

『小松ちゃん』が当時バーであつたコテジで始〔ママ〕めてダンスをやり出した頃は、踊りに来る客は一日に二人ある無し、勿論アドミツションも切符も要らなかつた。
『踊つた方は何卒女給にチップを五十銭やつて下さい』
と云ふことになつたのは、それから余程後の事である。

コテジの開業と、ダンスの導入、さらにはチケット制への移行については先に書いたとおりだが、このキャプションからさらにくわしい情報が得られる。バーとして開業したあとダンスの相手をつとめる女性従業員がいた。それは第1号の記事から、どうやら外国人女性従業員が踊りはじめ、のちに日本人女性もダンスの相手をするようになったと考えられる。さらに、この第3号の記事を合わせ読むと、ダンスのサービスを利用する男性客は、当初はさほどいなかったことになる。また女性従業員もダンスの相手をするからといって、店側は別の料金（入場料など）をとらず、女給もチップを余分にもらえるかどうかは客しだいだった。そのため、ダンスのパートナーをつとめた女給には50銭をチップとして渡してほしい、と店側が告知したことになる。

だとすれば、加藤が紹介した米国のチケット制のタクシードダンス・ホールの営業方法は、当時の大阪のバーの商習慣では対応できていなかった部分を補ったことになる。女給の立場からすれば、踊るごとに確実に収入が得られる。店側からすると、ダンスをしたい客が訪れた際に、その相手をする専業ダンサーが在籍していれば他店よりよいサービスを提供することができ、セールス・ポイントになる。男女同伴の客がダンスをしに来店したときには、別に入場料をとればよい。こうしてダンスの流行とともに、酒類を提供する飲食店のうち、女性従業員が接待をともなったかたちで働いている店では営業の形態を変化させ、これがのちのダンスホール営業の分派につながったと考えられる。

口絵22ページには、「最後の大会」と添えられた写真がある。パウリストアー、コテジ、パリジヤンの合同舞踏会ということらしい。ダンサーや関係者とみられる男女が34名、写っている。仮装をしている者もいるので、パーティだったことはわかるが、半分以上の女性が和装である。このあともまもなくして大阪のダンスホールは営業禁止になり、またコテジは既述のとおり廃業が決まっていたから、たしかに「最後の大会」となったはずである。

つづく23ページは女性が3名。上段右は南パリジヤンの林家文子で和装。上段左は枚方の桜新地「大つる」の美津代とある（目次では美代子）。「ダンスは御飯より好き」と書かれているが、羽子板をもった和装である。下段には南パリジヤンの河村文子。和装である。口絵の最後にあたる24ページは大和家の喜代三。ダンスとの関係や掲載の意図は不明である。

本文

扉には、巻頭言はなく、渡邊正直の詩「五月の雨」がおかれている。

つづく本文2～5ページは、主幹の宇津が書いた「村井新警察部長の御賢慮を希ふ」（目

次では「村井警察部長の御賢慮を希ふ」)で、この資料冒頭の時代背景で説明した経緯にかかわるものである。大阪のダンスホールを閉鎖に追いこんだ小栗について、次のように書いている。

かくの如く小栗警察部長は、立つ水禽の跡を濁して、その新規則の実施をも見ず兵庫県へ去つたが、規則草案についても決して、市民を愛する意味は無かつたものであるらしい、只、伝統的官吏趣味から、自己を愛する為めの『置土産を作らん』として今流行を極めるダンスに着眼したものであつて、新大和家の二階で、芸妓相手にダンスを踊る人間としての第二人格の見解ではなく、伝統的職業意識である、第一人格が躍動して出来た規則である為め、或は、その背後に、大象でも繋ぐ女の髪をあやつる遊廓の手が動いてゐるとの噂をさへ生むに至つたもので〔後略〕

ダンスの社会的意義を伝えようと雑誌をつくっている宇津からみれば、小栗ら警察による取締りは不当なものに映ったはずである。文章は4ページに及び、取締りの理不尽さを訴える。上はその一節だ。警察部長である小栗が、芸妓を相手に座敷でダンスを踊ったかどうかはわからない。また、「背後に〔……〕遊廓の手が動いてゐるとの噂をさへ生むに至つた」という部分は、それが噂であつたとしても重要だ。ここまでに見たとおり、新興の社交ダンスと、伝統的な花街とは必ずしも対立していたとはいえず、両者のあいだには人材の交流があり、相互に業態をとりこんで融合する方向性さえ示していた。しかし、〈警察がダンスを弾圧したのは、商売敵である遊廓が裏で糸を引いたからである〉というような穿った解釈が、当時から存在していたことを物語る。そして、じっさいに、ダンスホール業界と、伝統的な業態とは、取締り法令によって引き裂かれていく。ここでくわしく論じることにはできないが、1927年の大阪で進行していた事態こそが、その後の全国の風俗営業取締りの方向性を決定づけるものだったのかもしれない。

小栗は、大阪府から兵庫県に転任するのだが、その兵庫県こそが、その後のダンスホールの一大集積地になっていく。その過程にかかわる雑誌『ダンスファン』と『ダンス時代』については、おって確認できた部分について目次を復元し、掲載する予定である。

さて、警察と府を大向うにまわした宇津の大演説ともいえるページの上部には、編集部が用意したとみられる大阪の各紙のダンスホール規制に対する姿勢が比較対照できる記事がある。

翻刻 各地通信 ダンスに対する各新聞の記事（目次では「ダンスと各新聞記事」）〔筆者不詳〕

ダンス取締新府令が出て以来、どの新聞もどの新聞もダンス記事を書かねば恥のやうに、或はダンスを是とするもの、或は非とするもの、ホール開設者に対する私憤をいやす個人攻撃のもの、偶然知つた一人か、二人のダンサーの日常生活を総てのダンサーの内幕として知つたか振りの通を振りまわしたものの、中にはダンスを解する記者がゐないと見え〔江〕て、ホールへ出入りする客を漁り歩いて又聞きの受売を真しやかに書いたもの。

騒々しさの限りであるが、一二の新聞をのぞけば、他は総て、後は野となれ山となれ、他人の苦痛は十年尚忍ぶと云つた調子で、職業なるが故に書いた位な無責任な記事が多い、しかも此のダンス記事を通じて、その新聞の社会に対する權威、記者の人格頭脳までが明瞭に窺はれるのも面白いではないか、暇にあかして各紙の論調を調べて見やう。

●大阪毎日新聞

曾つて岩崎君の麗筆をわずらはし、美文的にダンサーの内幕を掲載し、それが急速に今日の隆盛を見るに至つた近因を為したのであるが、此度は如何したのか鳴をしづめて何も書かない。

●大阪朝日新聞

逸早く男女の記者を各ホールに派し約十日間に涉つてホール見聞記を如何にも新聞記者らしい筆で連載した外に、同人随筆欄で、岡本鶴松君が『社交ダンス撲滅論』の名論を吐いてゐる。

●大阪時事新報

『はつ夏の魅惑』の二日目『ダンスの汗と疲れ、我らの醍醐味でゐる』と云ふ題で、当りさばりの無い前置きと、有名なダンス党である市立工業研究所長高岡齋博士の事を載せてゐる。

●大阪中外新聞

中外閑談欄に『これはまた沙汰の限りだ』と云ふ大阪府警察部長小栗一雄氏の談話に尾鰭をつけて極端にダンスをこきおろした記事を載せてゐる。

●大阪新日報

五月十四日『旧弊を売物の大阪商人にも新時代の潮流が流れ込む小大丸』の題で、小大丸の白井幸次郎氏が芦屋の別荘にボールルームを造つたこと支配人の養子が踊りに行くこと、金沢利助川崎銀行の大阪支店長渡邊眞兵衛等の紳士のダンス場入り等を素破抜き、翌十五日は『観〔ママ〕楽の裏の悲哀、生活の苦悩』としてダンサーの見当違ひな裡面を書き、それが二十八日になると急転直下『ダンスを取締る人、旧い時代の人々だから其所に幾多の無理な点がある、新時代の要求で生れたものは須く圧迫するな』とある、新聞記事はもつと權威を持つて愆しいものである。

●大阪日日新聞

五月二十日から『モダンガールの跳躍の巷の縦権〔横カ〕観』としてユニオンホールを槍玉に挙げ、小森氏の個人攻撃とも見るべくラツチも無いもの、見ようによつては、何処か他の商売敵から頼まれたか、広告を断られた私憤とも見え〔江〕るものである。モット自重ありたし。

翻刻 国家社会政策からダンスを奨励した独逸 北パリジヤン 甲南倶楽部 顧問 加藤兵次郎

私の家は函館で百貨店を営業してゐるので欧米のデパートメントストアの研究と商業都市の視察を兼ね、大正八年天津丸に乗じて先づ米国へと志しました。

丁度横浜を出帆して三日目の夕食後でした面白そうな音楽につれて旅情を慰めるための舞踏会が催されました、勿論我々も招待されたのですが残念ながらダンスなんかやつたことのない私は徒に浮き立つ心をジツと押へ只啞然として眺めてゐるより外に仕方がなかつたのであります。

雲と海としか眺める事の出来ない十七日間の長い航海を彼等外人は長しともせず、国籍を超越して

昼は種々な室内運動競技に夜はダンスに喜々として戯れながら愉快に無邪気な旅を続けてゐるのに反して、彼等に加はることの出来ない私達日本人は仕方なさに日本人だけが集つて、演芸会を催し器用なボーイ連の落語浪花節乃至は尺八琵琶を聞いて辛くも無聊を慰めると云ふ有様でありました。

ダンスは卑猥なもの、それが踊れない為め外人から仲間はずれになつたと何の恥でも無いと簡単に片付けられる問題なのでせうか 否、柔道着を着て黒袴をはき木刀を持つて肩をいからすのが国粹論だと心得てゐる輩に云はしむればそれある哉、その同化し得ない処が日本人の美点であり、やがては日清日露の両役を征伏して外国の侮りを退け世界一等国となつたのだと云ふかも知れないが、それは大海を知らぬ井蛙の妄語、少しく活眼を開いて世界の大勢を見るならば、事件は単に一ソーシャルダンスに過ぎないけれども、この縮図を拡大鏡で引伸すならば、それはやがて重大なる外交問題ともなり、自ら掘つた墓穴に自ら飛び込んで、ゐながら敢て米国の排日法案の非をならすの愚や、臆けながら察することが出来るではないでせうか。

況んや外国人環視の中で柔道撃剣をやるに至つては、唯でさえ日本は好戦国であり軍国主義であるかの如く疑惑に包まれてゐる矢先きその意気は壮とすべきであるが手段としては如何なるものか、古来伝はる日本魂の表象として為すの真の剣道は余興として衆人の観覧に供すべきものではなく、船中の室内運動としての柔剣道は奥山の松井源水の居合抜きと何等選ぶ処がないのであります。

桑港上陸、古くからの取引先である犬養商店に先づ旅装を解き種々の話の後に船中でのダンスの話をした処が、犬養氏は当年六十近い老年であつたが私の説に非常に共鳴し、
『実は私も最近ダンスの稽古を始めた処です』

との話に早速その夜、桑港一のキャバレーに案内されました。

それからニューヨークへ行き、渡欧の準備をしましたが、恰も欧州戦直後であつた為めに容易に船室がとれず、その間二ヶ月ばかり滞在せねばならなかつたので、この期間を利用しセメ〔ンカ〕トラルパーク近くのレブススクールと云ふ舞踏学校に通つて此処に始めてダンスを正式に習得することが出来たのであります。

勿論その間、本来の目的である百貨店の視察は怠らずやつて居りましたが、函館を出る時に貰つて来た紹介状ぐらひなことでは、通り一辺の案内はしてくれても、肝腎研究せなければならない内部は見せてはくれず、靴をはさんで痒さを搔く思ひで、もう一歩核心に触るゝ事が出来ぬ或る焦慮を感じずにはゐられませんでした。

悩みの内にフト考へたのがダンスでした、思ひ立つたのが吉日と早速、恰も当時大売出しをやつてゐた紐育有数の百貨店があつたのでそれへ出向き、買物にかこつけて、其処の支配人と懇意になり『自分はダンスが非常に好きだが日本から来たばかりで様子がわを〔かか〕らぬから、一ツ案内してくれないか』と持ちかけた処が正に手応へがあつて『此の売出しが済んだらホテルを訪問する』ことを約束してくれた。

それから三四日経つて、その支配人は妻君と妻君の友人をつれて約束通りホテルを訪れ私を或る大きなキャバレーへ案内してくれ、其処で晚餐の卓を囲みながら夜の更くる迄踊りましたが、時間が経つにつれてお互の国籍観念による隔壁がとれ、胸襟を開いて十年の知己と語るの親しみを覚るまでになりました『何の用事で来た』と云ふやうなことになり始めて〔ママ〕『実はデパートメントストアの研究に来了』旨を打ち明けた処、その翌日、その支配人は心よく部下の一人を紹介し、私が渡米した目的を伝える〔と〕共に、ダンスが上手で非常に現代式な人であるとまで言ひ添へたので外来者の到底見ることの出来ない、内部の組織に到るまで、こと詳細に渡つて十二分の視察をとることが出来ましたが、私の習つてまだホヤホヤ〔くの字点〕のダンスが之程までに効果があらうとは私にも想像の出来なかつた事であつて、此の事実あつて後、私は此の時まで大事そうに旅行鞆の中に藏つてゐた、日本を出る時に貰つた商業会議所の紹介状を、何等用をなさないと悟つたので、悉く破つ

てしまひました。

ヤット船室がとれて、倫敦へ出発しましたが、太平洋の辱は大西洋で、と云ふわけで船中の舞踏会には今度は大手を振つて欠が〔ママ〕さず出て踊つたことは勿論であります。

そして、そのダンスで私は沢山の外人と懇意になりましたが、それが復た私の英国視察を非常に便ならしめたのであります、御承知の通り当時は、まだ欧洲全土血臭い風がおさまらず、まだ戦争気分が洋溢してゐた際でありますので、英国の工場等は何処も固く門を閉して外国人の見学などはもつての外であつたのを、船中の舞踏会で懇意となつた社長の息をたよつて、アームストロング会社を見る事が出来、外人の宿泊をさへ絶対禁じてゐたグラスゴーに行つてグラスゴー紙器株式会社々長の保証で数日間の滞在をさへ許され、当時日本から来て、視察も出来ずゴロゴロ〔くの字点〕ホテルで遊んでゐた連中から羨望の的となつた等は私が漫遊中でダンスが収めた成功とでも云ふ面白いエピソードであ〔り〕ます。

それから巴里に渡り、独逸へ這入りました 戦争直後で、入独日本人は僅に二十名足らずと云ふ時代で、殆ど全世界を相手に乾坤一擲、振つた賽の目は見事一敗地に塗れ再び起つ能はずまでに叩きのめされた独逸は、さぞ敗戦のうき目に国、民共に疲弊困憊の極に達してゐるだらうと思ひきや、建国に要する不屈の精神を奮起せしめ、併て思想変化による民心の離反を防圧するには宜しく享楽主義でなければいけないと云ふ社会政策から国家自ら援助をしてダンスと観劇を奨励してゐたので教会の晩鐘が鳴り響く頃から、どの劇場も何処のダンスホールにも人の波を打ち、独逸全土をあけて、踊れ踊れと云ふ有様で、全国活気に満ち満ち〔くの字点〕してゐたのには驚きました。

これをかの関東大震災後に於ける、帝都を吹き荒んだ殺伐な気と比較して、その善悪は別にしても日本人程街気に満ちた国民は無いと云ふことをツクツク〔くの字点〕感ぜずには居られません。

独逸で〔ママ〕ダンスを教はりに行つて四日目時間が遅れた事は前号申上げた通り、それから再び仏国へ帰りマルセイユで復た船を待たねばならなくなり二ヶ月間ダンス学校に通つたのであります。(文責在記者)

この加藤のインタビュー記事の最後のほうには、「夙川甲南倶楽部のホール開き」という写真がレイアウトされている。加藤も、ここでダンスの指導をしていたからだろう。写真には、めずらしく和装の男性が、同じく和装の女性と組んで踊っている。こういった楽しみかたが一般的になっていれば、あるいは社交ダンスが日本社会に早く定着した可能性もある。また、第4号以降が発行されていたなら、加藤のヨーロッパでのダンス体験をさらに知ることができたかもしれない。それも、惜しまれる点である。

本文10～12ページ「私の見た『ダンスホール』」は「安藤生」によって書かれている。欧洲戦争の終り頃の4年間、というから1915～1918年あたりとしか推測しようがないが、ニューヨークの「グランドセントパレス」というタクシーダンス・ホールのようすが、ホールの平面図的なイラストとともに記録されている。女性ダンサー約300名と男性ダンサー約50名がいたという。25セントの「入場券」(「ダンス券」3枚をふくむ)を購入して入場し、ダンサーを指名するためには別途25セントの「ダンサー券」を購入する。ダンサーが来ると、ダンサー券を渡すことになっていて、この25セントがダンサーの収入になる。入場券

についているダンス券はホール側の収入源だという。また、3枚を使い切って、それ以上踊りたいときは、ふたたびホール入口で1回5セントのダンス券を購入する、そういう仕組みになっていることが説明される。そのほか、ダンスホール内部のようすや、日本とのちがいなどにも言及されていて興味深い、ここでは省略する。

12ページ下段には、小さいが重要な記事がある。目次には見出しが立てられていない。「山口氏考案のダンス衣裳」というタイトルのもので、写真が添えられている。

南パリジアン主山口武雄氏が考案した大丸呉服店が調整したダンス衣裳は、袂の先きを割つて宝石をブラ下げた、夜会着にふさはしいもので価格も非常に安く出来そうである。

写真は、大丸の店窓に飾られたその衣装。着てゐるのは人形で、ダンサーではありません。

13ページからのコラム「ワンステップ」は、小倉、大阪のダンスホール規制についての短信。14～17ページ「七十歳のシヨウがタンゴの稽古」は、バーナード・シヨウが老境にはいってダンスの練習をしていることを伝える記事。18ページ「近代化された古代ギリシヤダンス」（目次では「近代化されたギリシヤダンス」）は米国でのダンサーの演舞の紹介、19ページには2枚の写真と説明があり、「ユニオンホールの大御所小森さん」（目次では「ユニオンの大御所」）は、ユニオンの創業、発展期の有力者である小堀勝蔵と森本耐三らの歓談のようすが、また「北パリジアンを訪れたフレスノ野球団」ではハワイから来日し東京での試合を終えた一行が来阪し、大毎野球団と対戦したのち、北パリジアンで遊んだ際のこと伝えられている。北パリジアンのバンドはハワイ出身者だったので、野球チームには旧知の者もいて再会をよこんだ、という。

20～21ページは読者からの意見の投稿と主幹・宇津の応答、松竹座でのエリアナ・パヴロバの公演の舞台写真、『ダンサー』誌主催の「講演と映画の夕」の当日の記録（沖野の講演内容と、ゲストとして告知していた石井漠、小金井みどりが来演しなかったこと）、松竹・吉田卯之助の追善興行のようすなど、小さい記事がならぶ。

22～24ページは、カルヴィン・ライアンが米国の雑誌に寄稿した「米国民をして宜しくダンスの国民たらしめよ」（目次では「米国民をしてダンスの国民たらしめよ」）の和訳抄録。また、「ダンス学士米国にはびこる」と「アン、ペンニントンの給料」というゴシップ埋め草記事もある。

25ページは「宝塚ホテルに於けるティーダンス」（目次では「宝塚のティダンス」）で、5月15日の午後に宝塚ホテル5階ホールで開催されたパーティのようすである。フロアで踊る男性が洋装なのに対し、女性たちには洋装もいるが、和装が目立つ。なお、大阪府のホール閉鎖方針を受けてのことだろう、また、タクシーダンスのような営業としてはなく社交のためのダンスの普及をねがったことだろう、加藤兵次郎や吉井茂右衛門、村田進らが発起人となり大阪社交倶楽部を結成、この団体がパーティを主催したと書かれている。この倶楽部では、「社交会館」を建設する計画ももっていたようだ。パーティでは外国人もふくめ100名がダンスを楽しんだが、参加女性の不足を想定してか、北パリジャンのダンサー約20名も動員された。しかし、ダンサーたちは、「切符を貰はないダンスに少しマゴツいた」という。タクシーダンスという営業形態が一般化しつつあるなか、社交のためのダンスをまじめに普及させようとする取り組みのひとつだった。

26～28ページにはユニオンから甲南倶楽部に移った藤村譲二（目次では藤村浩作）の「私の社交ダンス愚見」が掲載されている。そのあとに、新府令の施行が迫った大阪のようすが報じられている。この記事は翻刻しておく。

翻刻 来月一日から如何なる〔筆者不詳〕

愈々既設ホールの寿命も後一ヶ月と云ふ最後が来た、一体七月一日からは如何なるのだらう、いまあるホールの内で何処々が残るのだらう、と云ふ心配は敢てダンス党ならずとも話題の中心となつてゐる、他人の疝氣を気に病んだ新聞が、種々な揣摩憶測を真しやかに報導〔ママ〕し、不安を益々深からしめ、殊に夕刊大阪新聞は如何間違つたものか六月末日までを五月末日と感〔ママ〕違ひして五月二十九日の夕刊に『新しい府令によつて余すところ僅かに二日間で……』と与太振りを遺憾なく発起〔ママ〕して了つた、同紙にはパウリスターのダンサーであつた美貌で有名な小夜子を宿の妻としてゐる八木氏あり、ダンス通として又名手として有名な佐々木素明氏があるのに、取り返しのつかぬ失敗をやつたものである。

今大阪に残つてゐるダンスホールは先きに新府令発布と共に閉鎖した、北浜シヤンレー、新町倶楽部、四ツ橋オリエンタル、福島ダンスホールの四ツをのぞいて九箇所であるが勿論現在のまゝの設備では七月一日からは一ヶ所も営業出来ないことになるので、それぞれ新計画をたてると共に準備オサオサ〔くの字点〕怠りなく、既に出願に及んでゐるものも沢山あるがまだ正式に七月一日以後の営業の許可を与へられたものは一軒も無く、ユニオンとパウリスターの既設ホールと新しく出来るカルトンと新町の二葉倶楽部とが願書脚下の運命から通れて保留され稍々有望らしく見られてゐるばかりである。

他はどうするかと云ふと、北パリジャンは社交会館という株式組織にして、それが出来上るまで、夏の暑い間を阪神沿線香櫨園に臨時ホールを開いて移転するそうであると。

南パリジャンは新ホールの出来るまで名古屋のホールから一二ヶ月間借用方を申込んで来てゐるそうである。

コテジは各ダンサーの生活を保証して一ヶ月間休場すると云つてゐるが大抵他のホールも新しく許

可の下りる迄相当の給料を支給しダンサーの離散を防ぎつゝ、新ホールの建設を急ぐと云ふ方針をとるらしく、新聞の伝へる如く一時に百二三十人の失業ダンサーを生じて『風紀上から見て由々しき問題』は起らぬと見るのが至当であろう。

しかも新しくカルトン、二葉倶楽部の新星の出現あり、ユニオンはバンドのステージを表電車街路面へ移して、今のステージの処へ入口を造り、幾分広くなり、パウリスターは今銀行になつてゐる角まで二階を拡張し、そこに大昇降口を設け面目を一新すると共にダンサーを増員して一大活躍をすると思ふから仮令、他のホールのダンサーが職を離るゝとも之を消化するにさして困難は無いであらうと思はれる。

警察側の方針も決して絶対禁止と云ふのではなく、要は出願者の人格にあり、ダンスファンもホール減少による一時的寂寥は感じてゐるが将来は取〔敢カ〕て樂觀して可なりであらう。

34～37ページには「ダンス講座 一九二七年度に於ける新しいワルツの踊り方」(目次では「一九二七年度の新しいワルツ」)が写真入りで。これも外国雑誌からの抄訳である。

文芸関係はまとめて記載しておく。30ページには齋藤勇の詩「名無草」、その挿画が31ページで竹中しづかによる。32～33ページに渡邊正直の詩「奈良の夕」と宇崎純一の挿画。38～42ページは藤原二郎の連載「若葉輝く」の3回め、43～49ページには山上貞一の長編小説「赤き睡蓮」が掲載され、この作品には大塚克三のカット・挿絵が4点ついている。

このほか、「社会学実習」と題された漫画・漫文が分散して埋め草になっている。第2号の編輯後記にあたる「編輯室より」で予告されていたほどではないが、本文は4ページほど分量が増えた。記事や小説のなかには、第4号以降の継続を前提に、「つづく」「以下次号」などと書かれているものもあるが、第4号以降は現物が確認できておらず、あるいはこのまま出ずじまいになった可能性もある。

「編輯後記」については、翻刻をしておく。

翻刻 編輯後記

●第二号の書肆に列ぶのを見るや、息をも断がず、第三号の編輯にとりかゝる、何分手薄な編輯部なので、他の大雑誌の様に分業による、能率を上げる事が出来ない、翻訳は一斉内田君に御委せて、自分は口絵写真の蒐集、原稿依頼に走り廻り、その間には写真撮影もやり現像焼付、或は自分担当の原稿にペンを走らせる等、まつたく、恋人の用事でも之れまでには務まるまいと思ふ程の懸命な努力を尽したが、しかし此れは只僅かな日数を奪還し得たのみで再び発行日に遅れ何等酬ひられなかつた、けれど到底三号は出まいと危まれた本誌が、発行日に数日遅れたのみで今までよりは早く出し得たことは何と云つても痛快でならない。

●記事の内容をモット豊富にし、ダンスホールのごシップ流は廃してダンスファンの教科書たれと、大阪に於けるダンスの現状を憤慨する投書が殆んど毎日の如くに舞込む、低級なファン相手の映画雑誌流に墮落するなかれと云ふ鞭撻である、御説一々御尤と思ふけれど、そこには此処に書くことの出来ないジレンマがある。

- 近く頁数を増して六号活字を廃し、面目を一新する計画であるが当分漸進的現状で許して戴きたい。
- 御投稿を歓迎します、ダンスに関するものであればソーシャル、ステージその種類を問はない、前記の通り非常に手薄すであるため大阪のことは兎も角、耳にも這入るが京都神戸を始め、今度新しく出来た、名古屋、浜松、姫路、岡山等遠隔の地のホール通信は聞くによしも無い、読者諸賢の御通信を仰ぎたいものである。
- 慣例に甘へて書く編輯後記は先づこの通り皆様の御健康を祈る。

NYU 生

何社かの広告が奥付のあとに配される。裏表紙は、創刊号、第2号と同じくヒツジ屋本店の広告で、断髪的女性が肩をあらわにした青い上衣と、朱色のチェックのスカートをはいているような立ち姿で描かれている。

—2020.7.27受稿—